1991 SPRING No. 32

漫画の手帖

150 YEN





当森正

五味洋子

神竜知佳子

表紙イラスト

山田章博

特集

闇からの使者

南Q太

多田克己

くり鋭斗

中山星香

しりあがり寿

マシュマロ天国

神竜知佳子









オシマイ

▲永山晃子マンガ描けよな

よいこのうわさ

はるかなる時空を越え、頭骨は生長する!? 一度知ったらもう抜けられない 愛のグランドロマン超大作『王家の紋章』の魅力をテッテイ分拆!



あなたは細川知栄子先生の、「王家の紋章」をお読みになったことがおありでしょうか。昭和51年の昔より、月刊プリンセスに長期連載されている、現代と三千年前の古代エジプトを舞台に繰りひろげられる愛のグランドロマン大作。一度知ってしまったら、もうあなたはその極彩色に色どられた作品世界から抜け出す事は不可能に近い、と申せましょう。今回は「王家の紋章」と共に十ん年の、キャロル近藤さんをおむかえして「王家の紋章」のテッテイ分拆を、よいこのうわさスペシャル版としてお届けしたいと思います。この対談は「王家の紋章」①〜㉖(秋田書店刊)をごらんになった上でお読み下さい。

――今日はおいそがしい中どうも。キャロルさん「王家の紋章」の魅力って何でしょうか。

「そうですねェ。一言でいえば宝塚少女歌劇のそれに近いんじゃないかな。キラ星のごとくの登場人物にそれぞれ見せ場があって、それぞれにファンがついていて…。それとコミックスではみごとに灰色になっちゃってますが、カラーページがすごい。極楽鳥のような色彩が一大パノラマで展開されるのですから。」

――それにしても、キャロルはなぜこんなにもてるんでしょう。

「え? 私はそれ程でも…」

――いえ、あの、作中のヒロインのキャロルの方ですが。

「あ。う〜ん、結構始めの頃はキャピキャピした普通の女の子だったんですけどね。ただ金髪と青い目というだけでもててしまう。あ、奇跡もあるか。」

――奇跡でもなんでもないんですけどね。ただ彼女は考古学者志望だったから、史実はたくさん知っているからどんどんしゃべっちゃう。そりゃあ過去の人にとっては〝未来を読める姫〟になるんでしょうけど。

「過去に干渉してはいけないって、自分でわかってるのに、よくもまあはしからペラペラと。そして、どんどん重要視されて、自分の首をしめてるんですよ。でも、メンフィスだけはそういうキャロルだから好きになったってワケじゃないんですよね。

――でもカプター大神官だけは目的が違ってますね。彼は快傑ズバットに出てくる金仮面みたいな黄色マニアで、ただキャロルが金髪だから狙ってるだけですからね。あいつ、ハゲのデブのくせに目だけキラキラしてるから、笑っちゃいますよね。



現代

・メンフィス王の墓発見。
・アイシス、ミイラより復活。
・キャロルの父、アイシスに殺される。キャロル、アイシスに過去へ連れ去られる
・ライアン、キャロルを発見。(キャロル古代の記憶なし)
・キャロル、ピクニックへ行って再び現代に来たアイシスにナイルにつき落とされる

←探している――

3000年前

・エジプト奴隷セチにかくまわれる。
・メンフィスに会う→宮殿に連れて行かれる。アイシスに再会。
・アイシス、恋敵ミタムン王女を幽閉のちに殺害。
・メンフィス、ヒッタイト王の手下の放ったコブラにかまれる
→キャロルが救う(奇跡①)
♡メンフィス、キャロルを好きになる。
・キャロル逃げようとしてナイルに落ちる。
→ミヌーエ将軍、キャロルを発見。
・キャロル、メンフィスの愛をこばみ、奴隷小屋に入れられる。
→ウナスに会う
→水を濾過する(奇跡②)
・メンフィス、結婚すると宣言。
・キャロル、商人に扮したイズミル王

よいこのうわさ



「そんな事言っていいんですかァ？　確かに不思議な人だけど…。細川先生にはカクレ王紋ファンの事務局F氏が漫画の手帖を毎号お送りしてるって言うじゃありませんか。」

—読んで下さってるかどうかは、わかりませんけどね。

「イズミル王子って、キャロルをはじめの頃から狙ってるけど、あのしぶとさはすごいと思う。絶対にキャロルを手に入れたい！という気持ちと、キャロルを好き！という気持ちをカン違いしてると思うんですけど、どうでしょう。」

—あれは好きですよ絶対に。一生けんめいで。読者はみんな無駄だって知っていますよ。あの努力にむくいるために、最後にイズミルに何かいい事がありますように。

「そうかなァ。イズミルにとって、いい事って、キャロルを手に入れる事以外に何かあるだろうか。でもさー。でもさー。キャロルに対して好きっていう度を越してると思うの、彼は、別に古代なら普通なのかもしれないけど、キャロルが気を失っている時抱きしめたり脱がしたり、好き放題してるよ。現代に生まれたらリカちゃんマニアになってたりして。あ、ファンの人、すみません。」

—あぶないと言えば26巻のエジプト兵がマシャリキを馬にしばりつける図も異常でいいですね。隊長はSMマニアかな。アルゴンは最初、時々舌を出していたけど、後半は舌出しっぱなしですね。ペコちゃんみたい。

でもあいつ、少しだけかわいげがあるから、生かしておいてあげたい。ラガシュは死んでいい。

「ラガシュは頭をつかってかわいげがないからでしょ。アルゴン王って最初から無謀な事してるよね。でも本人は真剣ならしいから、おかしい。普通ジギタリスの花を寝室に飾る？　王様なんだからもっと派手な花を飾って欲しいよね。そういうケチな事するからキャロルに逃げられるのよ。」

—もしかすると心臓が悪かったんじゃないですか。あとカーフラ王女、彼女は派出に死んでほしい。俺こういう女嫌いだからね。おいおい、メンフィスの事わすれてるよ。

「カーフラはアイシスとアリに殺してもらいたいですね。そしてリビアとバビロニアが戦争になって、ラガシュ王が死んで、エジプトの国土が広がって、めでたしめでたし、と。メンフィスはね、きっと一番かわいい奴ですよね。始めの頃なんか顔までかわいい。性格もかわいいしなー。すぐにすねるし。」

—でも、あんなにメンフィスとキャロルは愛し合っているのに、何かあるとすぐにお互いを疑いますね。心から信じているワケじゃないんだよなー。単純というか、すぐに噂や策略にひっかかってしまう。そうか！だからかわいいのか。

「そうです。単純(バカ)ほどかわいいって言うでしょ。キャロルに対して一番素直でかわいいよ。すぐ赤くなるし。」

—イズミルもすぐ赤くなる。片想いであんなにホオをそめられるなんて、どういう精神構造しているんだろ。メンフィスは後半、顔が大きくなりましたね。キャロルの倍はあるような気がしますけど…。

「それは言ってはいけない約束。でもねー、実際メンフィスの胸にキャロルが抱かれてると大きさがあまりに違いすぎて気持ち悪い。絵は始めの頃の方が好きです。イズミル王子は顔がずいぶん変わったと思う。みんなそうして大人になっていくのね。メンフィスは頭骨も成長したのよ。」

—お前はそれでもファンか！　メンフィスの顔が大きくなったのは、キャロルが現代と古代を





ひたすら探している

ずっと探している

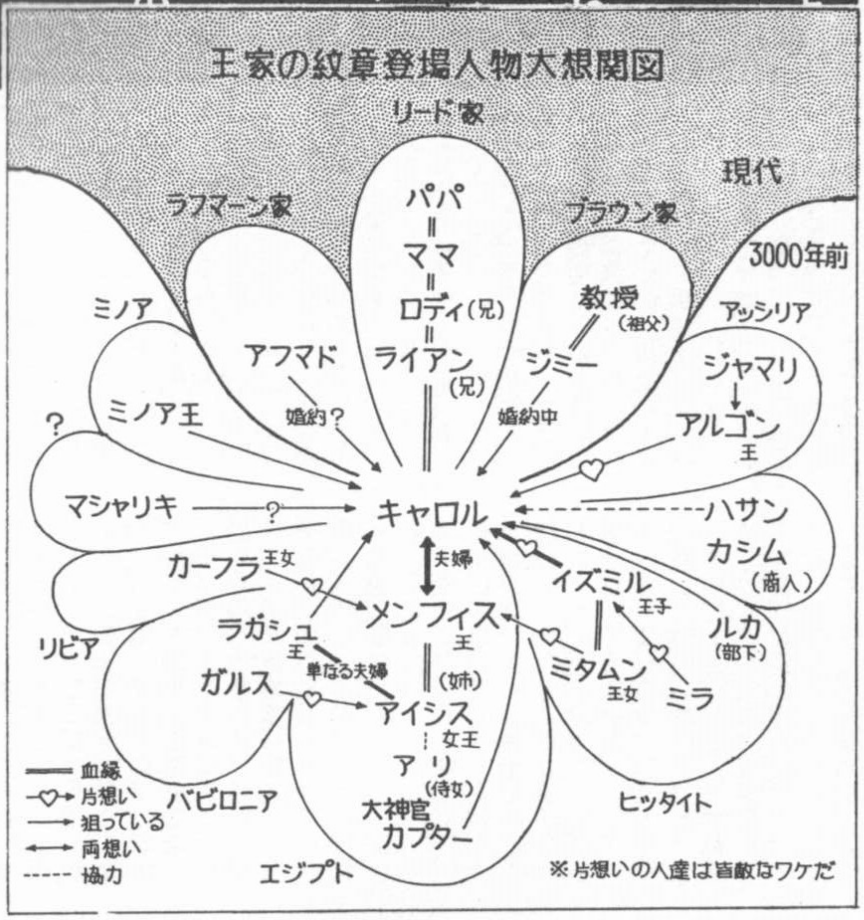
- ライアン、キャロルを発見。（キャロル古代の記憶なし）
- キャロル王家の谷で賊におそわれ、古代の兵に助けられる。
- ジミーとの婚約披露パーティのさなか、バラをひろおうとしてナイルに落ちる

子に救けてあげるとそそのかされる。
- キャロル、鉄の剣を作る（奇跡③）
- キャロル、イズミル王子にさらわれる→ヒッタイトへ。
- エジプトとヒッタイトのキャロル争奪戦争。
- キャロル、ウナスにアクアラングの代用品（皮袋）を教える（奇跡④）
- エジプト勝利→エジプトへ。
- イズミルの忠実な部下ルカ、キャロルの許へ来る。
- 多く未来を語る（奇跡⑤）
- メンフィスとの結婚式の途中、ライオンにおそわれナイルに落ちる。

エジプトで探している

- アッシリアのアルゴン王、キャロルをねらう。
- ジャマリ、メンフィスの許へ。
- イズミル、キャロルを発見→ヒッタイトへ。ルカ、キャロルの体のどこにも傷がないことを発見（奇跡⑥）
- メンフィス、アルゴン王にだまされアッシリアへ→捕まる。
- イズミル、キャロルと結婚すると宣言。
- キャロル、商人ハサンとカシムにアッシリアへ連れて行かれる→捕まる。
- キャロル、くさりにつながれたメンフィスに会う。
- キャロル、アルゴン王におそわれそうになってジギタリスの花を丸飲みする→ハサンに救われる。
- キャロルの策略でアッシリア城を水責めにする（奇跡⑦）
- ↳キャロル、メンフィス、エジプトへむかう
- 追うイズミルを流砂で撃退
- ↳エジプトへ着く。
- バビロニアのラガシュ王、アイシスに政略結婚を申し込む。

よいこの



往復しすぎて時空がゆがんだから、という説もあるようですね。現代に戻ると婚約者のジミーは情なくなりましたね。あれじゃもう戻ってもダメですね。アフマドの方がよっぽど男らしいよ。あいつも変だけど。ライアン兄さんは妹思いもあそこまでくると異常ですね。髪形も服も変だぞ。

「貴様もそれでファンかー!?髪や服が変なのはライアンだけじゃないぞ、ミノア人が真の変な人だよ。しかし、ジミーって本当に可哀そうだね、キャロルは結婚式の最中に現代にかえって、あっさり古代を忘れてジミーと婚約するという図太さ。その上、ジミーを愛しているなら子供ぐらいジミーと育てるって言えばいいのに、あっさりアフマドの所へ行っちゃう。』

—それもこれも全部ジミー、お前がしっかりしないからだ！

『王家の紋章』の単行本って読者コーナーがありますね。結構それぞれにファンがついているみたいですけど、ミノア王が、あの頭だったらファンはつかないですね。あとキャロルについてですけど、結局イズミルに3回、アルゴンに1回、ラガシュに1回さらわれて、アフマドにも軟禁状態1回。よくさらわれてそのつど都合よくぬけ出すものですね。警備がなってないですよ。こんな大事な人間を何だと思ってるんだ！　そしてアッシリア城を崩壊させて、バベルの塔を炎上させるし、たいしたもんだよ、この娘は。

「本当に考古学者の風上にも置けぬ人ですね、現代に戻って罪の深さをいずれ知るでありましょう。」

—まあ、いろいろ言っちゃったけど、とにかく『王家の紋章』はおもしろいですね。ストーリー展開なんて強引だけど、でも読ませちゃうというのはスゴイ事ですよ。このおもしろさはともかく一度読んでみないとわからない。

「うんうん。本当に『王家の紋章』はすごくおもしろいと思います。私なんか、小学生の頃からやめられなくて、ずっと追っかけて読んでいるんですよ。あーだ、こーだ言ってても、これがすごい漫画だということに





・ライアンの石油採掘場炎上。炎の中にさらわれるキャロルを発見。イズミルを撃つ



←さがしてるの—

・アラブの大富豪の息子アフマドキャロルを地中海で発見。（キャロル古代の記憶なし）キャロルを気に入り砂ばくの村にかくす。結婚を申し込む。
・ライアンにばれて、キャロルはリード家に帰る。
・キャロル、ライアンの商売敵一味に誘拐される。
・キャロル、アジトから逃げ出し、古代からの声をきき、岩山にかくれるがみつかってしまう。突然メンフィスのヤリに一人が殺される。

・アイシス、キャロル暗殺を企てるが何度も失敗（ワニ、コブラなど）
♡キャロルとメンフィス結婚。
・アイシス泣く泣くラガシュの許へ。
・キャロル、祝賀のためバビロニアへ。
・メンフィスの所へリビアの女王カーフラが来て、第2の妻の座を狙う。
・バビロニアへ向かうキャロルをイズミル王子がさらうが、突然ライアンに撃たれて失敗（偶然①）
↓バビロニアへ到着。
・アイシス、ラガシュ王結婚。
・キャロル、バベルの塔に閉じこめられ、ラガシュ王に月食がおこるとウソをつく。
・月食が本当におこる（偶然②）
・キャロル、石油でバベルの塔を炎上させて逃げる→砂ばくへ。
・メンフィス、イズミル、砂ばくで戦う。
↓エジプトへと逃げる。
・キャロル、メンフィスに会う。
↓船旅をしながらエジプトへ。
・カーフラ王女、カプター大神官と組む。
・キャロル、カーフラとメンフィスが結婚したと思いこみ、ナイルに身を投げる。
・カーフラ、メンフィスをおとそうと必死の功勢。
・エジプト、バビロニア、戦争する。
↓エジプトの勝利。
・メンフィス、砂嵐の中でキャロルの悲鳴を聞き、ヤリを投げる（偶然③）

よいこのうわさ

変わりはないわけですね。ひどい事をいっぱい言ってしまいましたが、細川先生にはずっと、ずっと描き続けていっていただきたいと思います。あー、このマンガ、これからどうなるんだろう。さて、26巻まで読んで、対人関係、ストーリー展開等、把握できなかった方のために、（いるとは思えないけど）年表と相関図を作ってみました。大河ロマンもの少女マンガらしくお花の形できれいでしょ♡ おおエジプトの母なるナイルよ。愛はひとすじに、きらめき……流れる……わがエジプトは永遠に……御身の流れとともにあり。



細川知栄子不完全作品リスト

くれないのばら	少女クラブ	'58.夏休み増刊
ふぶきのワルツ	少女クラブ	'59.3
赤いリボン	少女クラブ	'59.4
黒いこうもり	少女クラブ	'59.5～12
ふたりのねがい	少女クラブ	'59.夏休み増刊
母の名よべば	少女クラブ	'60.1～'61.12
二つの舞いおうぎ	少女クラブ	'60.お正月増刊
白菊のふえ	少女クラブ	'60.夏休み増刊
友情のともしび	少女クラブ	'61.お正月増刊
二つのバレー服	少女クラブ	'61.夏休み増刊
ふたりの白鳥	少女クラブ	'62.1～12
白ゆりのように…	少女クラブ	'62.お正月増刊
みずうみ	少女クラブ	'62.夏休み増刊
ロンと赤いくつ	なかよし	'63.お正月増刊
なくなパリっ子	週刊少女フレンド	'63.20～'64.12
星のナギサ	週刊少女フレンド	'64.31～'65.1
雪姫物語	週刊少女フレンド	'65.4
東京シンデレラ	週刊少女フレンド	'65.8～'66.16
リサのひとみ	別冊少女フレンド	'65.春
いつかふたりで	別冊少女フレンド	'65.夏
真珠の首かざり	別冊少女フレンド	'65.秋
なみだの京舞い	別冊少女フレンド	'66.1
ごめんなさい由紀ちゃん!	別冊少女フレンド	'66.5
真珠のいのち	週刊少女フレンド	'66.23～40
バラのゆくえは	週刊少女フレンド	'66.43～'67.10
はじめてのやくそく	別冊少女フレンド	'66.11
?（西部劇まんが）	週刊少女フレンド	'67.5
バラのゆくえは（第2部）	週刊少女フレンド	'67.13～32
わすれな草	別冊少女フレンド	'67.8
おしゃれな逃亡者	週刊少女フレンド	'67.37～'68.1
FIRST LOVE 初恋	別冊少女フレンド	'68.1
愛とゆめと…あこがれ	週刊少女フレンド	'68.3～'69.26
愛のちかい	別冊少女フレンド	'68.6
わたしのポピー	なかよし	'68.8
おとめのいのり	別冊少女フレンド	'68.9
愛のひとみ	別冊少女フレンド	'69.1
ぼくの天使	別冊少女フレンド	'69.4
愛の泉	少女コミック	'69.1～2、6～9
マイ・ラブ	週刊少女フレンド	'69.34～'70.17
風の中のわたし	別冊少女フレンド	'69.10
青い氷壁に	なかよし	'70.1
アテンションプリーズ	週刊少女フレンド	'70.21～45、49～'71.18
愛の泉	週刊少女コミック	'70.9～24、29～'71.13、16～26
ゆめみる恋	週刊少女フレンド	'71.34～'72.14
春をまつ恋	なかよし	'72.4付
花のロマンス	週刊少女フレンド	'72.36～41、45～'73.6
愛の序曲	週刊少女コミック	'73.23～37
黒い微笑	週刊少女コミック	'74.24～
王家の紋章	プリンセス	'76.4～
永遠の流れに…	ビバプリンセス	'78.夏季号
伯爵令嬢	ひとみ	'79.1-2、4～

（杉田健一・製作）

不明部分および当リスト外の作品などご存知の方は事務局へご一報下さい。

・アフマド、ライアン、キャロルを救出。
・キャロルの妊娠発覚！ジミー大ショック。
・アフマドが自分が父親だと名乗る（大ウソ）
・キャロル、アフマドと婚約披露のため、船でアフマドの家に向かう途中ライアンの商売敵の主犯の妹にガソリンを積んだ船をぶつけられ、船は炎上
・炎の中古代の兵士に守られてナイルにおちる

←さがしていると思う―

・アルゴン王メンフィス暗殺を企て失敗。

↓謎の人物マシャリキ、キャロルを発見→メンフィスに伝わる。 ←メンフィス、キャロルの帰ってくるのを待ってる―
・キャロル、マシャリキをつれて山へ向かう途中、カーフラ王女がアイシスに殺されそうになって、メンフィスに抱きつく所を見て絶望→山にこもる。
・イズミルに居所がバレる。
・ミノア人に居所がバレる。
・イズミル王子、キャロルをさらうが、ヒッタイトへ向かう途中、ミノア人におそわれる。
・リビア王、エジプトへ、カーフラとメンフィスを結婚させるべく向かう。

（※話はまだまだつづく）



五味洋子のアニメーション見聞録

サヨナラ、ヒロシマ3

8月8日～13日、第3回国際アニメーションフェスティバル広島大会、13～9月9日、ソビエト・アニメーション・フェスティバルVOL・Ⅵ（吉祥寺バウスシアター）、14～17日「知られざるソビエト映画―新しい波の源流―」でノルシュテインの処女作「25日・最初の日」上映（キネカ錦糸町）、15～19日、アニメーション・フェスティバルTOKYO，90（御茶ノ水・日仏会館ホール）。この他にも「白雪姫」の原語版上映、国立近代美術館の「手塚治虫展」とスケジュール一杯。例年にない猛暑を更に熱くするアニメ浸けの今年の夏だった。

先ずはヒロシマ3。新聞発表によると、3年前の第2回大会を4千人上回る2万7千人の観客を集めたという。

6日間、朝9時半～夜9時までを3回に分けて行われる全18プログラムに参加するのは、地元とはいえさすがに幼児二人連れては難しい。割と無理して参加した「ベスト・オブ・ザ・ワールド」「子供のためのアニメーション」がプログラムとして期待外れだったのは残念。2回に分けた「子供のための」プロの一つが長編「風の谷のナウシカ」（英字幕もなし）てのはどういう訳だろう。初日のプロ「平和のためのアニメーション」が「イエロー・サブマリン」と新作「クロがいた夏」の長編2本立てというのと併せ、ああ、これだけの時間があれば…と思ってしまうのは貧乏根性かな？（でも、例えば、2月に逝去された岡本忠成さんの追悼特集くらいあってもよかったのではないか）。

思わず文句が先に立ってしまったが、それでも全体として見ると、大爆笑編「猫帰る」他粒揃いの「ユーモラス・アニメーション」、森卓也さんプロ担当のアヴェリーVSチャック・ジョーンズの錚錚たる「ギャグ・アニメーション」（「へんてこなオペラ」の画面に出没するゴミに映写技師が惑わされかかるという新たな伝説を生んでしまった！）、悦子未亡人のスピーチが感動的、プログラム進行が充実していた「手塚治虫へのオマージュ」と、今回も様々な見所があったが、目玉はJ・ラセターをゲストに迎えての「コンピューター・アニメーション」特集であったらしく、見逃したのが今も悔やまれる。（別の日に見た「ニック・ナック」は良かった）。

作品上映に先立ち、作者が壇上に姿を見せるのも国際大会の醍醐味。あの「バンビ、ゴジラに会う」のマーヴ・ニューランドが作品そのままの男であること、何とも人を食った短編「ドッグ・ブレイン」でデビュー賞をさらったJ・ファルコナーの人なつこい巨体、グランプリを得た「雌牛」のA・ペトロフの誠実さ、「雪深い山国」を作った小柄で繊細な感じのベルナルド・パラシャス――と、名は体を表すならぬ、体は作品を表す。

しかし大会の華は何といっても各コンペティション。最終日の受賞作&表彰式を見ていると強く感じる。時間の都合で後2回のコンペしか見られなかったが、その中でも、イギリスの人形アニメ「ドラマー」、民族色豊かなハンガリーの「ウサギとハリネズミ」、とにかく可笑しい「永遠」、現代への不安に満ちた「親指トム」、若々しい鋭さが小気味よい「イゴリ」、無気味な暗喩を感じる粘土アニメ「ダークネス・ライト・ダークネス」と記憶に残る逸品揃い。次回は何としても全日見たい！と思ったのです。

とりわけて心に残ったのがフランスの「雪深い山国」。チベットの山奥で一人暮らす測量技師と、イエティの女の子（長い尻尾がある直立した犬みたいな可愛い子）のふれあい。そこへ現れたイエティ調査隊。たった五人の登場人物のいずれもが愛らしく、ほのぼのしたユーモアがあって。銀嶺の向こうへ姿を消す女の子。「デーオ（さようなら）」の挨拶が心に染みて…心を洗われるような、佳品の名に相応しい小品。こういうのが気に入るのは私くらいかなあと思っていたら、結構あちこちで誉められていて嬉しくなってしまった。最終日には「国際花と緑の博覧会賞」を受賞したのも相応しい。

しかし、かえすがえすも残念なのはカテゴリーGに「不射之射」「いばら姫またはねむり姫」と力作2本を出品した川本喜八郎さんが入賞を逸したこと（カテゴリーGは2位該当作なし）。既に他大会で実績のある作者ということが考慮されたらしいが、カテゴリー2位を与えることが栄誉か逆に失礼かは難しい問題でしょうが……。この「いばら姫…」、実は私は後日東京の上映会で初めて見たのだが、すっかり目を奪われてしまった。衣裳、小道具、舞台美術、いずれをとっても美術品のごとき精緻さ。15才、大人に花開こうとする年令の姫が、母のかつての恋男に抱く燃える思い、病の床にあってなお美しい母と、その輝く金髪でなく父王の黒髪を受け継いだ自分に対する交錯した思い。他の川本作品と比較しても遜色あるとは思われない。この作品が、川本さんが若き日に修行したチェコの巨匠トルンカのスタジオでかつてのスタッフが集って作られたものということを知らずとも、その感動に変わりはない。審査員の間で、日本人がヨーロッパの題材を製作することに対する疑問があったのかは知らないが、川本さんは次作は日本のものに還るそうだ。その日がいつになるかは解らないが、とにかくその日を楽しみに、待ちましょう。

最後の最後、受賞作品の上映が終わってから閉会式に移るまでに間が空きすぎ、観客がゾロゾロ帰り始めるという不手際。一言アナウンスを入れておけば済むことなのに。2回大会の、作家達も観客も一体となった素晴らしいフィナーレが頭に残っているだけに残念。今回、プログラム選定への疑問、映写ミスも目についた。公式パンフも前回のきめ細やかさから後退していた。次回があるなら是非課題にと願う。しかし、広島では、国際都市化を推進して来た荒木市長が今期限りで退陣。後継如何では、お金のかかる国際アニメ大会なんて続かないかも知れない。今回も3年を空けての実現、3回を重ねただけでも可とすべきかも知れないが、この醍醐味を知ってしまえば、たとえ何年おきでも続けて欲しいもの。その時、何処に住んでいるかは定かではないが、何としてでも参加したいと強く思ったのでした。

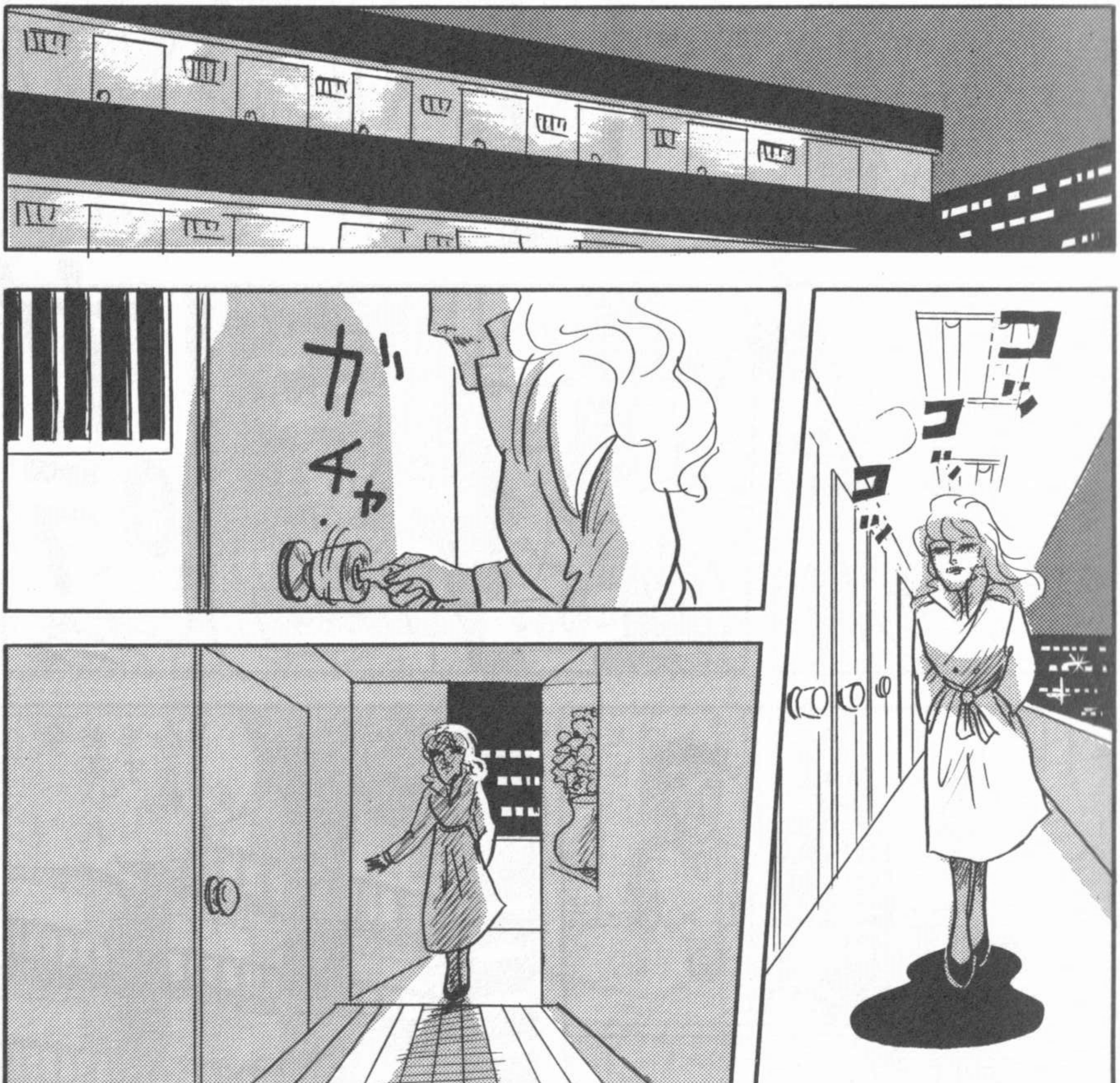
ヒロシマフェスが終わるとほうけてしまうのだが、今回はその間もなくお盆帰省で東京へ。そのアニメ三昧はここには記さないが、特筆すべきはソビエト映画専門館で4日間だけ上映されたノルシュテインの処女作「25日・最初の日」。この10分の為に払った1300円が高いか安いかはともかく、ノルシュテインにも過去というものはあったのねえ、という感じで・・・百聞は一見にしかず、とにかく見なくちゃ何も言えないのだ（見たらもっと言えないという影の声あり）。

（9月記）

-ひげのOL-③-

レプリカントの夜

いあがり耕




パ
……
ガラ
下町2号
山の手3号
ただいま……
おとうさん
かあさん
今お茶いれますからね
コポ
コポ



きょう会社でへんなお客さんがきてねー
わざとお茶こぼしてしらんぷりしてでてきちゃったわ
ピッ
ガク
オマエハ
モー
カワラナイナー
カク
カク
カーサンニニテ
ソソッカシイン
ダカラ
カク
カク
カク
バカ
ピッ
イヤデスヨ
ワタシノワカイ
コロハ
ソンナソソッカシク
アリマセン
デシタヨ
パカ



トコロデ ササコ イイヒトハ デキタノ？
やだー かあさん またその 話ーーー！
今は まだ 仕事が おもしろい しーー
いい人 なんか なかなか いないわよ
ピッ
オマエハ モー カワラナイナー カーサンニニテ ソソッカシイン ダカラ
カクカク
カク
ピッ
ワタシノワカイコロハ ソンナ ソソッカシク アリマセン デシタヨ
トコロデ ササコ イイヒトハ デキタノ？
パク パク パク



…………
パカ
オプション
人格チェンジ
ピッ
＜殺人鬼＞
ぐるん
ぱっ
テメー
コノヤロー
コロスゾー!
オトナシク
シネート
ヒドイゾ
キャー キャー
キャー キャー
キャー
やだー
こわーい


オレハ
スゲー
ヒトゴロシ
ダゾ
やだー
もー
こわーい
かあさん
目覚し
かけといて
やんなさい
はい
はい
……



特集 闇からの使者

イラストレーション 山田章博

闇からの使者と言えば妖怪、悪霊、悪魔などと呼ばれる未知の者達の事をさすだろう。彼らは人間界とは別の世界に住み、私達に直接厄災をもたらしたり、私達の心(体)の中に入り込み悪事をはたらかせたりするので、恐れられ忌み嫌われている。そして決して不滅ではないのだが寿命というものをもたないので彼らの永遠性は、それを求めてやまない人にとって憧れの対象である事も事実。恐怖と憧憬この二つが混じりあい闇からの使者は私たちの心のわずかな隙間にすぐに入り込んでくるのだ。

企画構成／佐野邦彦

無明の者達●佐野邦彦●近藤恵

さて、この特集にあたってまずは「妖怪」の第一人者・水木しげるから話を進めよう。水木の描く妖怪はこの日本の風土にそっと息づく、いわば自然の化身である。人間が誕生するはるか前より自分達のテリトリーを守りながら自然と一体化して暮らしてきた先住民といえよう。ところが人間が地上を支配するようになって、ある者は自分の防衛のために、ある者は人間を利用しようとして厄災を加えるようになった。「ゲゲゲの鬼太郎」はそういったいわば「悪い妖怪」と、善良な人間を守り、妖怪と人間がかかわりあいにならずに暮らしていこうとする鬼太郎達「よい妖怪」との戦いを描いたものだ。悪い妖怪は、理由はどうあれ人間の生命を無差別に奪い取ってしまう。人間達のSOSは妖怪ポストによって伝えられ、鬼太郎達は調査しに向かうことになる。そして悪い妖怪達はたいてい鬼太郎の話し合いの提案を拒否し、戦いを挑み結局退治されてしまうのだ。しかし鬼太郎の血みどろの努力はほかの多くの人間に認められることもなく、たたえてくれるのはゲゲゲとなく虫たちだけというのがお決まりのパターンとなっている。鬼太郎のおもしろさはネズミ男の存在が大きい。この人間と妖怪のあいの子は極めて世俗的な欲望中心の人物で鬼太郎側にも悪い妖怪側にも簡単に寝返ってしまう。事件の発端もネズミ男がからむことが多い。この強烈な個性をもつキャラクターによって「鬼太郎」の面白さが倍加されていることを付け加えておこう。妖怪と人間と動物の奇妙な共同体を描いたのが「河童の三平」だ。河童によく似た三平と河童の国から人間世界へと留学しにきた河童と、いそうろうの狸がお互いに利用しあいながら最後は強い友情で結ばれるまでを描いている。三平の祖父、父を冥土に連れていき、自分の成績のために三平の命も狙う死神との戦いが第一部、河童民族の滅亡を防ぐためにストントノス大王の七つの秘宝を手に入れなければならない運命を負った三平たちが途中に立ちふさがる七匹の妖怪を倒していく大冒険を描いた第二部、生き別れの母と会えたはいいがそのために三平は命を落としあの世へ連れて行かれてしまい、河童が母の為に三平の身代わりを努める第三部という構成で話が進んで行く。印象に残るのはあの世へ連れて行かれる三平や、その祖父たちの淡々と落ち着いた態度、そして話の舞台となった田舎の自然の美しさだ。水木しげるの死生感と自然を愛する気持ちが色濃くにじんでいることは言うまでもない。その他、代表作「悪魔くん」は地底から悪魔メフィストを呼び出し、その力を利用して世界を一つにして誰もが幸せに暮らせる社会を作ろうとした少年、悪魔くんとメフィストがさまざまな妖怪と戦うストーリーだが、初めの信念はどこへやら、そのうち妖怪の攻撃に対して防戦一方になり、結局メフィストは地底に帰り、悪魔くんはただの平凡な少年に戻ってしまうという竜頭蛇尾な話になってしまったのは残念である。水木しげるの描きたい妖怪像が一番私達に伝わるのは数多い彼の短編であろう。短編だと主人公を妖怪において話が進められるからだ。そこでの妖怪達は伝説として伝えら



れていたり、言い伝えのある石の下に封じ込められていたり、あるいは自然現象の一つとして私達が思っているものだったりする。ところが人間が好奇心や、欲望をもってそこへ踏み込んでしまい、妖怪達のいわゆる“たたり”を受けてしまうのだ。水木は人間とは別の世界に住む妖怪達の存在を確信しており、自然と一体となってそこにひそんでいる妖怪の世界に人間が土足で踏み込んではならないと思っている。そして人間は物質文明の中で搾取され、もがき苦しむ存在とし、死んでこの世から去ってはじめて解放されあの世で楽しく暮らせるものだと思っている。彼の絵を見ただけでも描かれる妖怪と自然の極めて緻密な描写と簡単な線でしか描かない人間(女は別だが)のアンバランスさが思いを伝えているかのようだ。

さて、次に諸星大二郎に話を進めよう。諸星作品には悪霊、精霊、神話上の怪物がよく出てくる。彼は日本、中国、ニューギニアなどに伝えられる神話や古事をたくみに組み合わせそこにそういった人間以外の者を登場させながら一つのストーリーに仕上げてしまう。

マッドメンシリーズはニューギニアから来たコドワという少年が主人公だ。彼はニューギニアの森の奥深くにいる「大いなる仮面」によって神話上の人類最初の人間カウナギの役を与えられ、まわりにはたくさんのマッドメン(精霊)が守り、彼を助ける。日本で出会った少女ナミコはもう一人の人類最初の人間ナミテの役を負い、コドワの後を追う。神話上のカウナギとナミテはアエンという者によって火を与えられ、森を逃げ出し、大いなる仮面の怒りをかってその呪いによって人間は死ぬようになったと言われている。アエンは悪霊として仮面になり、現地人や西洋人、日本人をあやつって物質文明を入り込ませようと森の開発を狙う。そしてコドワ達は森の伝統的生活いわば精霊信仰や儀式といったものを守り、それを侵そうとするアエン達と戦い続ける。この戦いは二つの対立する価値観を持つ神々による代理戦争なのである。そうして二人が再び出会い、大いなる仮面のもとへと戻ったとき、二人はカウナギとナミテの役を拒否した。「先祖の二の舞はごめんだ！自分の神話は自分で作る！」と言ったコドワの言葉こそ諸星の意志だったのではないか。精霊によって守られ他との交わりを断ちその純粋性を守ろうとする保守的な価値観と、欲望のために資源を食い尽くす物質文明の価値観、どちらにも未来はないのだと言いたかったに違いない。蛇足ではあるがこの話は日本のイザナギ、イザナミの神話も上手に織り込まれさらに大きな広がりを持っている事を付け加えておこう。神話上の怪物、餓鬼や馬頭観音、開明獣や麒麟が登場する話としては「暗黒神話」「孔子暗黒伝」がある。この二作は諸星自身の言葉を借りるが、「緻密で壮大なジグソーパズル」であり、ストーリーを紹介していては誌面がいくらあっても足りないので読者の皆さんにはともかく読んでもらいたい。(これほど面白い漫画というのはめったに出会えるものではないよ。)どちらの作品も主人公はブラフマンという仏典にある永遠に存在する原理、宇宙そのものによって動かされアートマンになり、宇宙が「空」に帰するまで見届ける者になる。様々な神話上の怪物はブラフマンによって甦り、主人公を助けるべく動いたのだった。数多くの神話、古事、遺跡などがすべて一本の糸により結びあげられ諸星大二郎による新しい神話が作り上げられた。その他では中国の道士や神を主人公として悪霊や怪物が次々登場する「異界録」「無面目」があり、またそういった者を追及する学者を主人公とする「妖怪ハンター」がある。特に「妖怪ハンター」は、諸星流の神話解釈が見事で、ヒルコというおそろしくインパクトがある疑似生命体がでてくる「黒い探求者」と、隠れキリシタンの村でのキリスト復活を描いた「生命の木」は特筆しておきたい。

諸星作品の悪霊、精霊、怪物は水木しげるのそれとは違い、何かの意志によって動かされている者たちだ。その意志とは我々が神と呼んだり悪霊と呼んだりするが基本的には宇宙そのものの根本原理である。実像はひとつであり、それを知るために彼らは甦り彩りをなしているといったところであろうか。最後に永井豪について書いて私の担当を終わろうと思う。

悪魔ー永井豪にとってそれは被抑圧者であり、地球の先住民族をさす。まず「魔王ダンテ」。かつて地球に住んでいた人間に意志と心を持ったエネルギー体「神」が宇宙から侵略し、無差別に人間を殺していった。しかし一部の人間は神への強い怒りと戦う意志、精神力によって神のエネルギーを吸い取り不死身の生物「悪魔」に変身した。「神」は何億にも分裂し、魂（エクトプラズム）となって類人猿の体へ入り人間へと変化させた。現在の人間と呼ばれる者は自分が神であることを長い年月により忘れてしまったので主人公は「魔王ゼノン」となり、地球にひそかに住む悪魔たちを集めて悪魔軍団を作り地球を人間、つまり「神」から取り戻すのだというところで話は終わっている。そしてそれは次の「デビルマン」へと発展する。「デビルマン」での地球ははじめ「神」が生命をもたらしたという事になっている。神はそこに生まれたデーモン(悪魔)を嫌い滅ぼそうとするが失敗し、残ったデーモン達は氷の中で眠り次の神の攻撃を待った。その間人間という生物がいつの間にか地球を支配していたのでデーモンは地球を取り戻すべく人間を抹殺しはじめたが、その作戦の一つのデーモンの人間への無差別合体は、デーモンより強い精神力を持った人間がデビルマンとなってしまうという誤算を生む。デビルマン達はデビルマン軍団となり、デーモン達との壮絶な死闘を繰り広げていったというストーリー。両作に共通するのは「神」の存在こそが邪悪なものであり、「悪魔」は地球に初めから生まれた先住民で生きる権利を持っているということ、悪魔の生存のためには「人間」の存在が邪悪であるから、人間を根絶やしにしなければいけないという事だ。それは「神」のあやまちを自ら行う事になってしまう。

永井作品での人間の多くは、残忍で小心者でエゴイスティックなものとして描かれている。それは彼の人間に対する基本的な見方だが、つまり我々が「悪魔」と呼んでいる者こそ、人間自身の姿ではないかと言いたかったのだろう。

さて、次は少女マンガの中では異色















を放つジャンルである心霊、幽霊話について。まず、何といってもこの人抜きでは話にならない山岸涼子から。山岸の描く話には死ぬに死に切れず恨みや強い念を残していった霊が出て来ることが多い。霊自体が主人公になっている話まである。主人公の女が自分が死んだことに気付かずに始まる「黄泉比良坂」は、何も見えず何も聞こえず何も言うことのできなくなった自分に驚き、さみしさのあまり人を死に引きずり込み、そのうえ最後には人に憑りついて終わるという恐ろしい話である。幽霊が、早く死んでここまで来て欲しいと思いながら死にかけた人の胸のうえに立っている図などは、夜中に目を開けたら自分の上に乗っているのではないかと思えてしまうようなアングルで描いてあり、夜中に一人で読みたくないような気持ちがする。じっくり考えてみれば一つの仮定にもとづいただけの話なのだが、モノローグで話を綴ってゆく演出方法や墨色と白色のはっきりとした画面がさも事実を描いただけのように思えてしまう。目の見えなくなったアイドルが鎌倉へ越して来て平家一族の亡霊に連れて行かれそうになる「海底より」。主人公は生きて動き回っているが、目が見えないことになれていないために死に絶えた平家の一族の恨みの声や泣き声が普通の人のそれと同じように聞こえてしまう。が、淡々とした画面では切り落とされてしまった自分の首をもった者が歩いていたり、矢の突き刺さった船が沈みかけていたり…。少し似た話に「青海波」がある。こちらは、目は見えないが死んだ人々だけは見えるというお話。

呪われてしまう系統の話では「わたしの人形は良い人形」であろうか。少女の夢であるきれいに着飾ったお人形だが、幼くして死んだ少女へ埋葬品として贈られたものをあまりにできが良いからといって親が柩から取り出して隠してしまったために、死んだ少女の人形が欲しいという念だけが残り、その人形にかかわる女の子を次々と殺していってしまう。主人公は霊感の強い男の子にすんでのところで助けられるが、その友人は主人公の変わりに殺されてしまう。しかし人形はまだ…?呪われてしまう話としてほかに「ネジの叫び」、「死者の家」などがある。

「夏の寓話」は、主人公が一人広島で過ごした夏のストーリー。主人公がひまつぶしに行く公園でいつもひとりぼっちの女の子は夕方になっても家に帰らず、雨の日に傘もささずにいる。家はどこと聞いてもはっきりした返事を返さない。しかし花火大会の日に主人公が留守番している家に突然たずねて来て手持ちの花火をしようとねだる。燃える花火をその子の手に持たせた途端、彼女は自分が原爆で燃えてしまったことを思い出す。この話は、ずっと淡々と進んで来て、突然すべての符号がつながるように構成されているのだが、すべてをつなげるのは真っ白い見開きの右下に描かれた光に焼かれる少女の絵なのである。このコマはすばらしい、言葉を必要としない絵と言い切ってかまわないであろう。幽霊ものの苦手な方でもぜひ一度お読みいただきたい、幽霊であることがテーマではない話である。それとは逆に“幽霊”が副主人公的な役割を果す「汐の声」を紹介しよう。この話は山岸の作品の中で2番目に怖い話だと思う。親におだてあげられているだけで、自分には何の力もないと思っている霊感少女である主人公が、ある日テレビの撮影のため、“幽霊屋敷”と言われている家にスタッフや他の自称霊媒師らと泊まることになってしまうところから始まるストーリー。筆者はこの話についていろいろと、『ここがこんなに怖い』等、書きたくて書きたくてたまらないのだが、いかんせん読者の中でまだ読んでいない人がいるかもしれないので、止めておくことにする。話してしまったらそれこそサスペンス小説の犯人を教えてしまうような愚挙になりかねない。

ここであえて話を紹介したくないものに、「ゆうれい談」がある。山岸涼子自身の体験談や、ファンから送られてきた不思議な体験を漫画に描いたものであるが、怖さの余りに読むのが止められなくなって(途中で止めるほうが怖い)最後まで読んで、そのまま本棚の奥のほうにしまってしまうような恐ろしさがある。ファンから送られて来る実際におこった驚異な出来事に、山岸自身が怖くてファンレターを開封出来ず、いつまでも段ボール箱に入れっぱなしにしておいたという逸話が作中に書かれている。本当に怖いからね、怖がりな人に無理やり読ませたりしない事。筆者は怖さのあまりに周りの人間をだまして読ませるという悪事を働いてしまったけれど。

山岸家に実際に起こった出来事を転んでもただでは起きぬ精神で描いたものが「あやかしの館」。自立しきれない中年の女の建てた家に起きる奇怪な出来事に下宿人の女の子が次々にであうストーリー。山岸家はあまりにいろいろなことが起きるので実際に玄関の向きを建て変えたという裏話つきなだけあって、幽霊が非常にリアルである。階段や廊下を歩く音がする、振り返ってみると誰もいないという体験の覚えのある人はけっこう多いはず。事態が起きたときは怖くないけど後から考えると怖い、あの奇妙な空白に満ちている。こういう話をフィクションだと思っている人にもけっこう読めるお話である。

そして大作、「日出処の天子」。これは闇に住む者のテーマに合わないかもしれないが、連載中から人気が高かっただけあって、非常に面白い話である。繊細な美しい絵に乗せて、くりひろげられる厩戸の王子(聖徳太子)、蘇我毛人、推古女帝らの壮麗かつ真摯なドラマである。天才といわれた厩戸の王子は一体どんな人物だったのか、聖徳太子と蘇我毛人を主に斬新で大胆な解釈で進められるストーリーは、女性ならではのみごとな細かい感情表現のもとに描かれ、われわれは時間を忘れて読みいってしまう。本当にすばらしい作品である。佐野氏の推薦する「暗黒神話」と一緒にぜひ読んでいただきたい。キーワードは“弥勒菩薩”。

山岸涼子の作品には仏教色のつよいものが多い。それゆえか、作品は主に非常に静かな情景の中に描かれる。しかし、その静かな中にも激しいまでの感情が渦巻いており、時折見せる動の画面は我々を圧倒する力がある。今回テーマからはずれてしまうため、紹介していない作品だが「天人唐草」がその代表例と言えるだろう。日本人によくある“恥ずかしい”という感情から静かに人格が歪んでいくさまが見事にあらわされている。山岸涼子はこういった日本人の言葉の裏にあるものを表現することのできる大変に貴重な作家である。

心霊物で、もう一人とりあげたい人物がいる。ささやななえである。「化粧曼陀羅」や「水面の郷・水底の守」、「たたらの辻に…」など、自由な発想で力強く話を描いている。「化粧曼陀羅」は片思いの彼の家の向かいになる下宿へと主人公が引っ越して

来たことから始まる。初日から奇妙なことが起こり続けるが、好奇心の旺盛な主人公は彼を取り巻く環境自体が自分にとって危険であると指摘されたにもかかわらず、どんどん深入りしていってしまう。緒形一族、気味の悪い盲のおばあさんに謎の少年は何をしようとしているのか。彼の家や下宿を含む広い区域には何が隠されているのか。下宿を歩く姿の透けた女の子たちは一体誰なのか。くんだり神とは一体何か。解明していくにしたがって、主人公は一族から離れることが出来なくなってゆき、読後もなにやらすっきりしない終わりかたをする。

清美と道子のシリーズ、「たたらの辻に…」は、昔製鉄をしていた家の末裔である道子におこる、呪いを描いたストーリー。家の呪いから道子を守るために引き取られ育てられた少年、清美がその家に伝わる鉄製の神剣で家に潜んでいた怪物を退治する。本当は兄弟ではなかったと知った二人のさわやかでほのかな恋が全体の重い空気とをときどき一掃し、心地よいものとなっている。同じ二人のシリーズ「水面の郷・水底の守」は、日本を縦横無尽にオオナムチの卵をめぐって動き回る二人とオオナムチの使いにとりつかれた先生、そして「たたらの辻に…」でも活躍した二人のいとこである建男の繰り広げるお話。二人が前作よりも強くひかれあっていることに前作との時の流れを感じる。この話にもオオナムチという古事記に出てくる神が怪物として引用されている。

ささやななえの作品を読んでいて強く思うのは、ささやななえ自身が、すごくこういったものたちに興味をもって調べているということに裏打ちされた隙の無さであろう。日本に歴史が始まった頃から伝わる因習、習慣などがこまめに話の陰にでてきて、付け入る隙を我々に与えないのである。今ありがちなホラーコミックと一線を画す作家であると言える。

こうしてみてくると、少年誌に載せられるこういった系統のものには一つの言い伝えなどから作者自身が話をふくらませていったものが多いが、少女誌に載るものには、身近に、ひょっとしたら自分に起こりうる物事を描いたものが多いようである。遠くをみつめる少年たちにはスケールが大きくドライで夢馳せられるものが、足元を確認しつつ歩む少女たちには家の中で起こるようにウエットで忍び寄り来るものが、それぞれのイメージする“闇”であるのかもしれない。

日本人にとって比較的とっつきやすいギリシャ神話。星座にはほとんどギリシャ神話から取った名前が付けられているのでなじみやすいのかも知れません。ここでは星座という華々しい舞台に上げてもらえず闇に隠れている怪物たちについて書いてみようと思います。

◆ハルピュイア

ご存じの方も多いと思われます。彼女達は3人とも4人とも言われる女性の顔をした猛禽です。同じような姿をしたセイレーンと違い、あまり良い話は伝わっていません。姉妹に虹の女神のイリスがいるのが少しばかり不思議です。アルゴ船の物語に出て来ます。

◆グライアイ

一つの目と一つの歯を奪い合って使っている、生まれながらの白髪の老婆の3姉妹のことです。この姉妹は北の洞窟に住んでいました。形状はあきらかに怪物なのですが、人格があり、とりあえず話すことができるため、物語の中に出てきてもあまり奇怪な存在には思えません。その物語というのはペルセウスの冒険談なのですが、少々なさけない役どころで、彼女らは3人共愚かだったために「ゴルゴンの首を取る」と大言造語したペルセウスに、たった一つの目を掠めとられてしまい、一族の者であるゴルゴンの居場所を目玉を返してもらうために言わされてしまうというものです。教えた後、ペルセウスによって氷の中に閉じ込められたという説もあります。

◆ゴルゴン

海に住む醜怪な顔の3姉妹。一番下の娘のメドゥサのみ美しかったという説もありますが、よく言われるような、蛇の髪、猪の胴体、青銅の手と翼を持ち、見開かれた目、裂けた口にひげ、猪鼻、という形態の方が怪物として妙に説得力があるというもの。見た者が恐怖で石になってしまうほど恐ろしい者たちです。彫刻も何度見ても美しいとは思えません。前段に出て来たペルセウスに姉妹のうちただ一人不死身でなく、ポセイドンの子を宿してもいたメドゥサは寝首をか



中山星香

闇に生きる怪物達

近藤　恵



かれてしまいます。その首はアテナ像が手にしている盾についています。

◆ペガサス

怪物と言って良いのかわかりませんが、生まれ方が怪物なので載せてみました。

メドゥサの切られた首から流れでた血から怪物クリュサオル（黄金の剣）と共に生まれた、翼を持ち天を駆け巡る天馬です。英雄ベレロポンの乗馬となり、キマイラを倒すことに協力しました。

◆テュポン

百の蛇の頭を持ち目から火を吹く怪物。一つ一つの口からは神々しい声から犬の声まで出たと言います。成長するとすぐさまゼウスに戦いを挑みます。復讐の女神エリニュスたちに人間の食べ物を食べると強くなると言われ、実行した結果ひどく力が弱まり、トラキアの山で血を流しました。その山にはハイモス山と（ギリシャ語で血を流すの意）名前が付きました。

ほかにも海にいたテュポンに投げ付けた島がシシリア島になり、テュポンの火からエトナ山ができ、テュポンとゼウスが所せましと戦い歩いたあとが今も地名として名残を残しています。不死身のテュポンはその後すべての悪い風の源となり台風(Typhoon)の語源となっています。

◆エキドナ

上半身は美女、下半身は大蛇。竹宮恵子の『イズァローン伝説』にもこういう化物が出て来ましたっけ。彼女は百の目を持つアルゴスに殺されるのですが、兄弟のテュポンとの間にたくさんの怪物たちを生み出していってくれています。

◆キマイラ

首から上がライオン、胴体は雌山羊、尾は蛇の口から火を吐く怪物です。リュキアのあたりを荒らし回っていたところを、英雄ベレロポンに退治されてしまいます。エキドナとテュポンの子。ちょっと形は違うけれど、あしべゆうほの『クリスタルドラゴン』に出て来ましたね。

◆ヒュドラ

水蛇ですが、胴体は犬、頭を割るとその分だけ頭が増えていくといういかにも殺しにくそうな怪物です。エキドナとテュポンの子で、アミュモネという泉に住んでいました。英雄ヘラクレスの贖罪のための2番目の難業として殺されます。戦っている最中にヘラクレスが踏み潰した巨大な蟹は12星座に数えられる蟹座になっています。

◆ケルベロス

地獄の番犬。3つの頭を持ち、尾は蛇。背中にも一列に蛇が生えていたといいます。エキドナとテュポンの子。冥界に生きている人を入れないこと、冥界から脱走しようとする死者を食べてしまうことが彼のお仕事でした。ヘラクレスに12番目の難業として格闘した末に捕えられてしまいますが、連れ戻されていまだに地獄の番をしています。

◆オルトロス

ゲリュオンの牛の番犬。頭が2つありました。エキドナとテュポンの子。英雄ヘラクレスに10番目の難業として、ゲリュオンの牛を盗む際に殴り殺されてしまいます。



◆ラドン

100の頭を持った怪竜。ヘスペリスの黄金のりんごを守っていました。英雄ヘラクレスに11番目の難業でヘスペリス姉妹の黄金のりんごをとるとき、殺されてしまいます。怪物にしてはめずらしくと、言いますか、単にヘラクレスなどの英雄に殺されると武勲の証として星座にされることが多いのですが、竜座として夜空を飾っています。

◆スピンクス

女の頭とライオンの体で、翼を持っています。エキドナとテュポンの子。彼女の謎かけは有名です「地上に同一の名を持ちながら、4足、2足、3足になるもの、そのうち4足で歩くときが1番遅いものはなにか」。これを解けぬ者はスピンクスに食べられてしまいます。が、彼女はこの謎をオイディプスに解かれて身を投げて死んでしまいます。命を懸けてなぞなぞをするとは怪物ながら大胆な性格だと思います。

◆ネメアのライオン

エキドナとオルトロスの子で、月の女神セレネーの乳を飲んで育った不死身のライオン。英雄ヘラクレスの1番目の難業として素手で殺されました。不死身と言われるのに腑に落ちません。ヘラクレスの武勲の記念にと星座（獅子座）にされています。なお、ヘラクレスの着ている毛皮はこのライオンのものです。

◆ギガンテス

腰から下が2匹の蛇になっている巨人達の総称です。（ゼウスの叔父にあたりますが）ゼウス一族と巨人の戦い（ギガントマキア）と呼ばれる戦いをし、かなりさまざまな展開をした後、英雄ヘラクレスにヒュドラの毒を塗った矢で殺されていってしまいます。

◆ゲリュオン

3つの頭をもち、3つの体を持つ怪物。萩尾望都の『半神』の3人版か。ヘラクレスの10番目の難業として牛を盗まれたため、後を追って行きますが、途中でヘラクレスに射殺されてしまいます。

◆スキュラ

元は美しいニンフであったのに、海神グラウコスに恋したために、魔女キルケに憎い恋仇として3重の歯の生えた口を持つ6つの頭と12本の足を持つ怪物に変身させられてしまったというかわいそうな人です。そのうえ不死身だった彼女は岩になってしまったということです。あわれ。

さて、ひととおり怪物たちの解説は終わりました。

こうして見てみると、怪物というものはいつの時代も英雄たちの物語を盛り上げるために悪役となって殺されていっています。

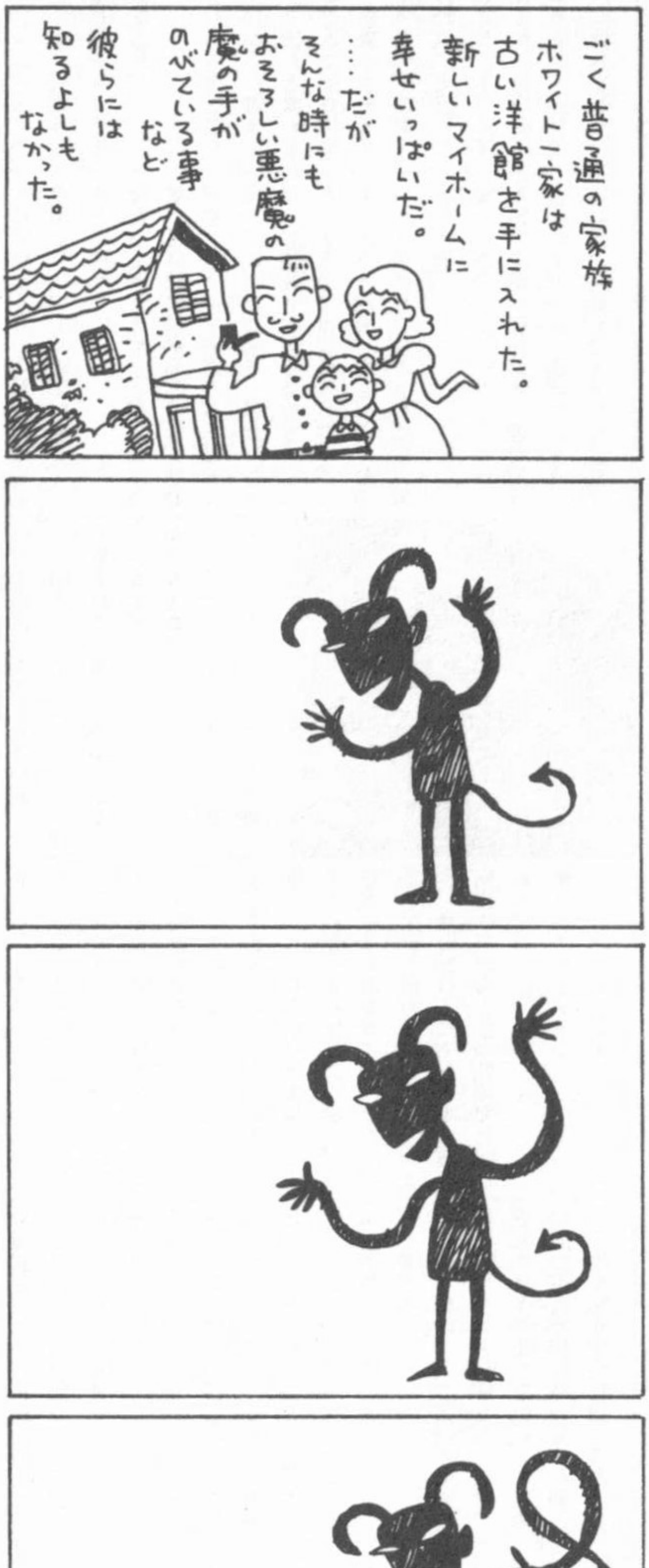
しかし、怪物はテュポンのように台風の語源になるなど、恐ろしい自然現象の具象化であるわけですから（ほとんどの神様も自然にあるものの具象化ですが）、自然現象を退治した英雄がいるという伝説は、遥か昔に時折巻き起こった天災から人々が逃れたいと思う心が作り出し、そして伝えたものなのかも知れませんね。



当森正の 闇よりの使者さん



当森正の 闇よりの使者さん



当森正の闇よりの使者さん



当森正の闇よりの使者さん



妖怪博士をするヒマがあったらペン習字でも始めろ。当森正。



◆こんにちは、妖怪博士の当森正です。宇宙とタメグチきくホーキング博士。正体はイカの死神博士。塾経営のかたわら博士やってる ふくろう博士など、この世に博士は多いけれど、妖怪博士ほど役にたたない博士もいません。これなら怪マンガ家(©藤本)さくらのみおの方が偉い。怪マンガ家の上に妖怪博士の南房秀彦は更に偉い。ではマンガ妖怪 岸川浩利はどうかというと、それはまた別の問題だ。などと同人誌風雲録などもまじえて筆を進めてますが、人が妖怪博士に陥るきっかけともいえる四人の人物、妖怪四天王の事について語らせて頂きます。



◆一人目はいうまでもなく水木しげる先生。マンガという手段で妖怪のビジュアル化につとめ、妖怪をポピュラアなものにしました。たまに、『妖怪事典』で「小池婆」としたものを、『世界妖怪なんでも入門』では「グルマルキン」にしてしまうなどズサンな絵の使い方がありますが、それも妖怪のウヤムヤさを出していて味です。

◆二人目は、そのビジュアル化の先駆者鳥山石燕先生。喜多川歌麿らの師匠であり、独特のぼかしを用い、妖怪画に執着しました。その画の多くを模写した水木先生も「やっぱ妖怪の魂(ソウル)を知っていた」と言ってます。故手塚治虫先生も師の画集を持ってたそうです。

◆三人目は良きに悪しきに日本民俗学会の巨人である柳田國男先生。もちろん妖怪博士は『妖怪談義』しか読みません。

◆そして四人目ですが日本妖怪博士界の大物、佐藤有文先生。先生のお書きになった『いちばんくわしい妖怪図鑑』シリーズで何万人の妖怪博士が生まれたことか。先生の著作は妖怪史の資料としては全く認められないんだろうけど、妖怪を娯楽の材料として、あの手この手で楽しませてくれます。読者を楽しませるためならデタラメな記述もいとわず、北斎でもゴヤでも異形の絵ならとりこみ、勝手に妖怪の名前をつけたり、石原豪人にボッシュの模写をさせたりと大活躍。『マカロニほうれん荘』や『ちびまる子ちゃん』にも先生の作品の影響が見られます。前述の南房さんも、同じく『世界妖怪図鑑』を何冊も持ってる佐藤ファン。ところで永らく佐藤先生のメシのタネのひとつであったプランシーの『地獄の事典』が完訳ではないものの、出版されたのには先生舌打ちしてるんじゃないかな。

◆妖怪はイメージ遊びのひとつとしてこれからも受け継がれるべきだと思うが、妖怪博士にだけはなるな。百々目鬼(ドドメキ)とか元興寺(ガゴゼ)とか窮奇(カマイタチ)とか読めても宅建受験にゃ関係ないぞ。全然。それでは、ガンバリス道ほととぎす。びろびろびろーん。









◆新紀元社より多田克己さんの「Truth In Fantasy 幻想世界の住人たちⅣ（日本編）」という400ページの本が出ています。日本の妖怪事典とも言うべき多田さんの労作で、漫画の手帖31号に登場した渡辺筆さんも、表紙と本文のイラスト1/5を担当しています。（渡辺さんは他にも「幻獣ドラゴン」や「悠久の魔術」などのイラストも描いておられます。



これが元祖人面魚だ!

今年は北海道で虹を見ました。層雲峡も行ったよ!


今宵は年に一度の百鬼夜行日じゃからのう
楽しみにしていたからのう……
たのしみじゃあ
そうじゃそうじゃ
ああ……たのしみじゃ
ひひひひひ
けけけけけ
のうたのしみじゃろう
あの～
おやまあ人間かえ
私は何故にここにいるのでせう
え?
おぬしはロクロ首の花子じゃあないかえ しばらく人間界で生活していた……
ああそうでしたわ……
妖怪はフロンガスを吸うと頭がボケると言うからのう
人間になりすまして生活するのもちと問題じゃあの
夜行が
恐い話にしようと思ったのにお笑いになってしまった……
わーい水木せんせいに冷し中華をおごってもろってしもたぁ～ へへへ日本語になってない…
産女
夜道や橋のたもとで、赤児を抱いてくれとせがむ。身ごもったまま死んだ女の幽霊で、下半身が血だらけ。
隠れ座頭
夜道を歩いて来る妖怪で、出会った者は異界に隠されるという。また、隠れ座頭の餅を拾うと長者になる。
次第高
人のような姿をし、背が高いなあと思うとぐんぐん見上げるほど高くなり、逆に見おろすと低くなる。
イジャロコロガシ
長野県南巻村海ノ口の古びた堂で、夜遅くコロコロとイジャロ（ザル）が転がり、人の前で人の形になる。



様々な動物の中で、もっとも
じょうずに変身する。よく人
を化かす。予知能力がある。
人に憑く。





鳥山石燕の「百鬼夜行拾遺」
に記されている女の妖怪。夜
間、高い屏風をこえて、寝て
いる人をのぞき見る。

夜になると首を伸ばす妖怪だ
が、昼間は普通の人間と見分
けがつかない。首に紅色のア
ザの輪がある。





宮崎県の一つ目小僧。大きな
目がひとつギョロリとある。
夜中に家に訪れる。暗い所に
出て人を驚かす。



宮城県の金華山沖に出る。首尾がわからぬほど巨大。夜間は海底で淡く光る。これが出るとブリが大漁。





香川県仲多度郡多度津町では、丑三時に四辻を通ると七人の童子に出会う。行き逢うと気分が悪くなる。

夜道に手杵の形の妖怪が出る。前方からスットンスットン音を立てて来て、出会い頭に人をひっくり返す。





20年以上年経た猫は、尾が二又にさけ、霊力を持つ。すると後足で立って踊り、人間の声で話すようになる。


花子さん あのウワサは 本当かえ
はい!
人の世が終って……
妖怪の時代が来る……
もうすぐよ
最近・村おこしに妖怪伝説が各地で掘り起こされているぞ・新年本格的な妖怪ブームになるかもしれない……それとも……
世紀末じゃ! ええじゃないか ええじゃないか ええじゃないか ええじゃないか ええじゃないか ええじゃないか…
マジムン
豚、家鴨、犬、器物の姿で現れる沖縄県の魔物。豚や家鴨のマジムンに股下をくぐられた者は死ぬ。
夢良るぞ

ダイジェスト版『カリガリ博士の子どもたち』

S・S・プロウアー

切りばり　中村一成



■"恐怖"の原点

デーモン的なおそれがあり…それとともにその奇妙に逸脱したかたち、一種の発育不全の分枝である、幽霊にたいするおそれがある。それはまずはじめに〈無気味な〉ものの感覚のなかに湧きおこるものである。原始人の心の中に発生し、歴史におけるすべての宗教の発展の出発点をかたちづくったのは、この感覚なのである。〈デーモン〉も〈神〉もどちらもこの根から芽を出したものであり、〈神話的な統覚作用〉や〈幻想〉がうみだしたものはすべて、この感覚が客体化されたさまざまの様態にほかならない。―ルドルフ・オットー

"畏怖をひきおこす神秘"に対する"不安"が、あらゆる宗教感情の前提条件なのかもしれません。人類の文明の原初から、名状しがたき何かが、既にこの世界にはあったという事なのでしょうか。

「人類最古で最強の感情は恐怖である」
―H.P.ラヴァクラフト

■"恐怖"のバリエーション

①狂気と密室〜精神病院の恐怖〜恐怖映画のイコノグラフィーにおいて、精神病院は重要な役割をはたしている。ひとつには狂気それ自体が恐怖をあたえるものだからである(ヒッチコックの『サイコ』とポランスキーの『反撥』がこの主張に役立っている)。しかし、精神病院において権力がとくにおびえさせ、はずかしめるようなやり方で他人に行使されるからでもあるのだ。そして精神病院が、特定の社会の問題、その社会が負わせる傷と社会が解きはなつ暴力を、強調され凝縮された、しばしば象徴的な形で描きうる閉じられた機関であるからでもある。ヴァル・リュートン製作の『恐怖の精神病院』からアラン・ジェシュアの『ショック療法』にいたるまで、映画は何度も精神病院をこういうふうに扱ってきた。この装置のとくに興味深い使い方が、『放射能X』でゴードン・ダグラスと彼のチームによってなされた。そこでは、まずタイトル(原題『Them』)がふれている巨大なミュータントたちの存在自体に、次にその隠れ場所に疑いがかけられる。これらの点についての役に立つ情報を自発的に申し出る者たちが、精神病院及びアルコール中毒病棟にいる人間だからだ。そしてそれから、もちろんサミュエル・フラーの『ショック集団』(一九六三)がある。ほかにも多くの閉じられた場所が争うように恐怖映画に使われてきた―『獣人島』の島の実験室、『歩く死骸』(一九三六)の牢獄、『悪魔のような女』の地方の学校、そしてダリオ・アルジェントの『サスペリア』(一九七七)では(非常に特異な)バレエ学校までが。

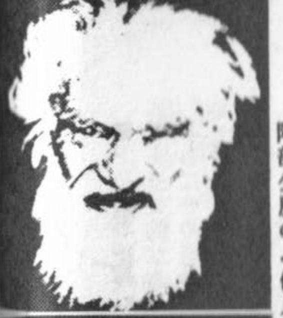
―フランジェの『顔のない眼』、ロバート・デイの『血の廊下』(一九六二)デイヴィッド・クローネンバーグの『ラビット』(一九七六)をはじめとする数えきれないそのほかの映画が―S・S・P

『アルジャーノンに花束を』(『まごころを君に』)もそうですね

②分解された人間〜露出恐怖と去勢恐怖、アイデンティティの喪失

しかし、無気味さの感覚に習慣的に結びつくようになってきた露出は、別の種類のものである。人間の脳髄、その持主の頭蓋から切り取られながらなお機能している脳髄の露出である。それは『フランケンシュタイン』でそれなりの役割をはたしていたが、カート・シオドマクの〈ドノヴァンの脳髄〉を翻案した三つの作品(『レディとモンスター』一九四三、『死んだ男の脳』一九五三、『復讐』一九六二)でも恐ろしい力を発揮している。また、脊髄をひきずる特大の脳としかみえないものでできている、SFの〈昆虫の目をしたモンスター〉というヴァリエーションもある(『顔のない悪魔』一九五八)。それから『怪奇!呪いの生体実験』(一九五八)のような、脳そのものではないが、切断された首が生きて思考しつづけるという作品、ジャック・ゴールドの『メドゥーサ・タッチ』(一九七八)のような、修復も回復も不可能なほどにつぶれた頭蓋の中にあって奇跡的に、そして害をもたらすようにはげしく活動する脳を描く作品もある。テレパシーと(とりわけ)念力の無気味な、ふしぎな作用が、こうした映画の訴えるものの多くの説明になっている。

『つかむ手』(1915年のパール・ホワイトの主演もの)や『五本指の野獣』ロベール・フローレイ、一九四六)のような題名は、恐怖映画において人間の手がいかに重要な役割をはたしてきたかに私たちを気づかせてくれる。ゆっくりとひらくドアのうしろから這いでてきたり、ベッドの上の羽目板からヒロインにむかってのびてきたり―さらには、体から切りはなされてもこういうことをやりつづける。このモチーフ、切断されてもまだ動きつづける手というモチーフはブニュエル(『アンダルシアの犬』から1962年の『皆殺しの天使』まで)やベルマイン(『魔術師』のような目の高い映画作家たちがとくによろこんで恐怖映画から借りてきたモチーフである。フロイト以後のこの時代において切断された手がしばしば意識的に去勢のシンボルとして使われていることは、ほとんど疑いようがない。ロバート・アルドリッチの『ふるえて眠れ』にはこうした象徴化がかなり明白に出ている。この面では、〈切断された手〉のモチーフは、切断された舌、テレンス・フィッシャーの『ミイラの幽霊』で愛しすぎた罰としてクリストファー・リーの口からなまなましく切りとられたあの舌のモチーフと同質である。しかし、それ以上に、切断された手は、ロン・チャーニーが何度も扮した手足のない人間や奇形の生き物がはたらきかける不安、手足を切断された者にたいする不安(『フリークス』の最初と最後のシークエンスがたくみに利用している嫌悪は、ここからうみだされる)と結びついた、手足を切断されることへの不安(チャーニーの演じる人物への同情的な思いいれは、これがうみだしている)を暗示するものである。ここで、『ロンドンの暗い眼』(一九三九)、『恐怖の任務』(一九四四)『目のみえない死者たちの墓』(一九七二)などにおける、脅威をあたえる盲人たちの使い方や、『オペラ座の怪人』(一九四三)、二つの『肉の蝋人形』一九三三、一九五三)、『怪人フィブス博士』(一九七一)におけるクロード・レインズ、ライオ







ネル・アトウィル、ヴィンセント・プライスのそこなわれた顔のことが思いおこされる。〈切断された手〉のモチーフはあきらかにこれとも関係がある。また、〈ゾンビ〉や〈動きまわる死者〉のモチーフ、脳が機能しなくなり心臓が止まってしまったあとも体の組織がまだ目的意識をもった活動、破壊的な活動をつづけることができるのではないかという不安にもつながっている。このことはまた、〈切断された手〉のモチーフと、ドッペルゲンガーのモチーフがはたらきかけるアイデンティティーの不安、ヴィーネの『芸術と手術』(一九二四)やフロイトの『狂恋』に投影されていたような不安であり、疑いである。『狂恋』では、ピアニストが、列車事故でそこなわれた手のかわりに彼の腕に移植した手が、彼の心が嫌悪するような行為をむりやりさせているのだと考えるようになる。また、恐怖映画の主人公がまったく文字どおり「顔をなくす」のを私たちは何度見ていることだろう！『顔のない眼』では、私たちは実際にジェネシェ博士が犠牲者のひとりの顔をひきはがすところを見る。『狼の時間』にみちている異様な恐怖の最たるものは、ヨハンが語るように、「帽子と一緒に顔もとってしまう」女であろう。ともかく、私たちの顔ほど、自分で見る場合も他人に見られる場合も、私たちのアイデンティティーに直接つながっているものがほかにあるだろうか？—S.S.P

阿部公房の『他人の顔』ですね

③人格の分裂〜ドッペルゲンカーの恐怖〜

恐怖映画の重要な存在の多くは、分割され違ったものとして区別されている世界を不幸なかたちに結合させている。かれらは同時に人間の性質とけだものの性質をもつ。死者に属していながら、生者の世界を動きまわる。傷つきやすい才能のある人間でありながら、破壊的な悪魔にとりつかれていると感じている。『ザーロフの猟犬』のレスリー・バンクスは、そのハンサムな顔の片側が古い戦争の傷で引き釣っており、内側の2重性が外にあらわれているかのように二つのちがった横顔をみせる。

ドッペルゲンガーの主題は、このように性的な疎外の主題とともに恐怖映画の中心的なものである。『ドリアン・グレイの肖像』は、映画作家たちに彼らの好きなショック・シークエンスを使う機会をもたらした。この作品がほかのマイナーな文学作品から生まれた幻想映画、『洞窟の女王』(一九三五)、『炎の女』(一九六五)『失われた地平線』(一九三七)、『半月通りの男』(一九四四)、そしてテレンス・フィッシャーによるみごとなリメイク『死をまぬがれた男』(一九五九)などの作品と共有しているシークエンスであり、自分の若さを人工的にひきのばしていた男あるいは女を天罰が襲うところをみせるものだ。突然、一瞬にして極度の老いと病いのしるしがその人物に出てくるのだ。ポーの〈ヴァルドマール氏の病床の真相〉を下敷にしたロジャー・コーマンの『ポオの恐怖物語』(一九六二)のエピソードのひとつでは、催眠術で死を止めていた男がいきなり異様に溶けだしてシロップ状に分解してしまうところを表現するまでになっている。こうしたシークエンスの魅力は複合的なものである。映画館の座席という安全な場所でショックの不意打ちをうけるよろこび、他人が極限状況に直面しているのを隠れて見ていたいという願望、科学および疑似科学が達しうる限界にたいする好奇心、生と死という重大なプロセスにさようさせうる奇跡的な力への願望、そうした力を使って私たちが共通の運命だと考えているものを逃れた者たちがその勝利の場面からいきなりひきもどされ、私たちの避けられない運命を共有させられるのを見る満足—そういうものから構成されている。」—S.S.P

『ウイリアム・ウィルソン』ですね

④科学の恐怖と魔法の恐怖

『カリガリ博士』のスクリーンに私たちが見るツェザーレの像は、その動作、挙動によって、後の恐怖映画で親しまれることになるさらに二つの像にもつながっている。そのうちのひとつはあきらかにゾンビである。普通の生きている人間には知られていない意識の中間状態に存在しているのだと私達が推測する、生者でも死者でもない存在である。もうひとつはゾンビが恐怖映画のメインストリームからはずされていったときにそこに登場してきた、ある決定的な瞬間にその作り手、操作者に反抗する〈人間的な〉性質をもった機械、自動人形の像である、この点でツェザーレは、『メトロポリス』以降の人間のかたちをした、あるいはそれ以外のかたちの無数のロボット(『2001年宇宙の旅』と『デモン・シード』の、有害なやり方で〈人間的な〉役割を果すコンピューターで頂点に達する)の先駆的なものなのである。しかし、ツェザーレは人間性の大事な部分、つまりその意識と意志を奪いとられた人間である。ある悪意にみちた力によってその夢のなかで自分を失うことをしいられる。夢をみる人間なのだ。

恐怖物語映画が最初から利用してきた二つの恐怖がある。一方に科学の生みだしたものに対する恐怖があり、もう一方に魔術師や錬金術士の邪悪な野望に対する恐怖がある。私たちはたえず次のように問われている。よこしまな人間が、生命の創造者(カーロフのやったモンスターのような、あわれな口もきけない生き物ばかりでなく、一九一六年のオットー・リッペルトの連続活劇の題になっている〈ホムンクルス〉のような、堂々としたほとんどの人間をこえた存在をもつくりだす)としてであれ、死の配分者としてであれ、昔から神のものとされてきた特権をわがものとしたら、どんなことになるのか？私たちのつくった機械が、『2001年宇宙の旅』におけるように私たちのコントロール能力をこえるものになったり、私たちがその存在に気づかずにいた私たちの意識下の力に(『禁断の惑星』や『惑星ソラリス』におけるように)侵入されたりしたら、どんなことになるのか？『ゴーレム』、『ウエストワールド』(一九七三)、〈フランケンシュタイン〉映画は、基本的にはおなじでもだんだんやっかいになるコントロールの問題につながる、増大してゆく技術文明の複雑さを示す、三つのちがった時期の映画制作の代表的な例である。

官僚と科学は、ロージーの『呪われた者たち』では恐るべき同盟を結んでいるが、ほかの作品においては対立する力として提示されている。アンドリュー・テューダーは〈ドラキュラ〉型の「みつけだしてやっつけてしまえ」式の恐怖映画から、過失を犯すか〈狂っている〉かする科学者の出る〈フランケンシュタイン〉型をへて、主人公がすばらしく積極的で、清廉で、きびきびとしている反官僚的な人物(彼の前では形式主義的な手続きなど吹きとばされてしまう)として描かれる一九五五年の『原子人間』に代表されるような型の作品へといたる記憶すべきラインを示している。映画作家たちはあきらかに、私たちにこうした「世界を危険におとしいれる官僚の優柔不断さにあくまでもたちむかう個性的な科学者」に敬意をいだくように要求する。テューダーはそっけなくこう注釈する「事実としてはこの人物がまず第一に危険をひきおこしたのかもしれないのだが、それは知識の進歩のためにやむをえないリスクとして示されるのだ」。—S.S.P

■"恐怖"の映像

エドガー・アラン・ポーのある物語が…若いエイゼンシュテインに強烈な感銘をもたらした。ポーは、窓から巨大な有史以前の怪獣が山の頂へとゆっくりと体をひきずってゆくのを見た—ところが、怪獣だと思ったのは窓ガラスを必死になって這いのぼってゆく小さな昆虫にすぎなかった。

—Y・バルナ

これは五分の三がまだ天才で、五分の二は全くのたわごとと言われるポーの世界を示すものです。(詩的

で映像的なポーの幻想に対し、乱歩のそれは映像的ではあっても多分性的で象徴的な幻想と言うべきでしょう）

ここで、一般的に認められた意味での〈物語〉ではないすぐれた恐怖映画があることを思いだしておくべきかもしれない。雰囲気の換気、ムードと連想をひきおこすことによって、その効果をつくりあげるものである。どこへ通じているのかわからない階段、ひとりでにひらくドア、風にはためくカーテン、つかんでくる手やあわれみを請うようにのびてくる手、もやのかかった水面にただようヴェールなどによってである。ジャン・エプスタンの『アッシャー家の末裔』はそういう映画である。ベラ・バラージュが正しく指摘したように、明快なストーリーの提示をおこなわず、その世界的な恐怖小説の傑作を読んだあとに残る印象を、シュールレアリストが影響を与えた方法で表現している感じの作品である。つくりたかったのは、まったく何もおこらない映画ではなく、ほとんど何もおこらない映画、「主題のないことが、神秘と隠されている象徴性を現実の重みから解きはなつような」作品である、とエプスタン自身が説明している。彼の『アッシャー家の末裔』は、エドガー・アラン・ポーにたいする、映画による数少ないほんとうに重要なささげもののひとつであると考えられて当然である。私たちがスクリーンに見るイメージは一種の幽霊的な分身である。生きており、呼吸し、話をするようにみえる人間たちにみちた街や自然の風景の幻影。その人間たちは、そこにいないことによってのみ存在している。彼らの現物はすでに死んでいることもある。

―S．S．P

『グラウンドのマウンドの下には魔物が棲んでいる』といいますが、映画館の闇についても同じことが言えます。これを仮に〝映画の幽霊〟と名付けることにしましょう。十八世紀から十九世紀にかけてのゴシック恐怖小説は、１７９０年代の影絵芝居（例えばE．G．ロバートソンの魔術幻燈〝ファンタス・マゴリー〟を経て、百年後の奇術師ジョルジュ・メリエスの幻想映画に影響を与えました。しかし、彼の映像は〝映画の幽霊〟に依存するものなので、恐怖とは縁遠いものでした。観客たちがメリエスの愉快なファンタジーに得られなかったものは、安全を保障しながら恐怖をあたえるショックの感覚であった。リュミエール兄弟が、駅に真正面からつっこんでくる列車を、まるでそれが映画館のスクリーンから観客に向かってとびだしてくるかとみえるように撮影したときにつくりだしたようなショックである。あるいはまた、途中でカメラを止めてダミーに置きかえることで、びっくりしている観客に本物の人間の首が断頭台で切りおとされるのを見ているような錯覚をもたらした、一八九五年のアルフレッド・クラークの『スコットランド女王メアリーの処刑』にあったようなショック。さらには、エドウィン・S・ポーターが『大列車強盗』（一九〇三）に、ひとりのならず者がその銃を観客にむけて狙いをつけているクローズアップをもちこんでつくりだしたようなショック。メリエスのファンタジー、クラークがやった極限状態の直接描写、リュミエール兄弟やポーターの観客へのみせかけの攻撃―これらはすべて、恐怖物語映画の重要な要素になるのである。

―S．S．P

現実を直視しよう―恐怖はおもしろい。ホラー小説の基本的な魅力は、ときどきそれがこんな口実を与えてくれるからだ―「ドアを閉めきって脳を中に入れるな。みんなでたのしく騒ごうぜ。」『ポルターガイスト』や『死霊のはらわた』や『エイリアン2』のようなSFX先行映画のプロットがいかに貧弱でも、われわれはそれを気にしない―つまるところ、悪夢はめったに首尾一貫した筋がないものだ。イメージだけで特殊な魔法が動く―ぱっと飛びだす醜悪な顔、とつぜんつかみかかってくる手、バケツ一杯の血糊、このすべてがハイテク・カーニバルの小道具である。われわれはグロテスクで予想外なものを見るのが大好きなので思わず悲鳴をあげたり、笑いだしたり（ときにはその両方を同時にやったり）する―そこ、恐怖のびっくりハウスの中では、そうした行為が許されるだけでなく、むしろ奨励されているという認識にあぐらをかいて。（中略）

ゾンビが明るいものに見えるのは、それが活字の中か、映画館のスクリーンの中に閉じ込められているからだホラー小説やホラー映画の中では、われわれは自分の不安を抑え、それを秩序づけ、たいていの簡単な脱出路が提供されている―われわれは好きなときにホラーのびっくりハウスを出ていけるのだ。すべてのホラー物語は、すべての悪夢とおなじく、ハッピー・エンドで終わる。われわれはそこから目ざめ、いまのはただの夢だったといえるのだ。いや、それとも？

―ダグラス・E・ウインター（以下・D・E・Wと略す）

■グラン・ギニョールの奇妙な味

映画館は（どんなに悲鳴を上げたとしても）、一歩踏み出すだけで明るい戸外が待っている〝びっくりハウス〟に似ています。しかし、常に絶対安全圏という訳ではありません。〝映画の幽霊〟がいる限り、いつ何時グラン・ギニョール（※）にならないともかぎらないのです。（※１８９７年に創設されたパリのグラン・ギニョール座で専門に上演された、グロテスクな恐怖をかもしだす短い通俗劇。〝のぞき見の神話〟とも呼ばれる）いままでのところ、こうした



関係の無意味さをもっとも強烈に投影しているのは、アドルフォ・ビオイ・カサーレスの小説をもとにした１９７４年のエミディオ・グレコの『モレルの発明』である。（中略）ジーン・ヤングブラッドがエクスパンディッド・シネマ（拡張映画）と呼んだものをめぐる物語である『モレルの発明』は映画事態の性質にむかう意図において、フロイトの『狂恋』、ヒッチコックの『裏窓』（一九五四）と『サイコ』、パウエルの『地を吸うカメラ』（一九五九）、リーヴスの『妖術師たち』（一九六七）、そしてデ・パーマの『悪魔のシスター』（一九七三）のような、のぞき見の物語を見たり、他人を見張ったりしている主人公を、映画館の観客が見させられる作品につながる。気味の悪い存在が自分の姿を見せずに窓からのぞいている多くの作品にも、おなじことが認められる。そうした作品は、映画館にくるという選択をしてきて、暗い観客席から、その物語がかれらの前に展開する恐怖をひきおこす者とその犠牲者をじっと見ているという観客の体験を再現し、パロディー化し、そのヴァリエーションをつくってみせるのだ―（中略）「あなたについての物語なのだ」、恐怖をひきおこす者は私達にこう語りかけているように思われる―「偽善的な観客よ私の同類、私の兄弟よ」と。

―S・S・P

■恐怖の魅惑

ホラー小説の中核には、ひとつの確固たる信念がある。それは、ハムレットの言葉を借りれば、「生者必滅」だ。われわれはその謎の解答を求めてはいない。それが信念の問題であることを、たとえ本能的な知識にすぎなくても知っている。われわれが求めているのは、自分の懐疑、不信、不安を告白する方法である。ホラー小説は、人間の死ぬべき運命という事実を前にして、笑い、あるい



は泣くという、めったにない機会を提供してくれる。

恐怖のびっくりハウスにはいるとき、われわれは究極の奈落に落ちこむ—いちばん暗い夜を見る—そして、つぎに闇から出て、光の中にはいるとき、われわれは心の奥底にひそむ恐怖と対面して、しかも生きのびたわけだ。

そのあとは…?わかりきったことではないか。われわれはまたそれをためしたくなる。 —D・E・W

「恐れに匹敵する喜びはない」 —クライヴ・バーカー

■恐怖映画の分類

恐怖映画は三つの特徴的なグループに分類できるという。チャールズ・デリーによれば、①「人物の性格をめぐる恐怖」②「ハルマゲドンをめぐる恐怖」③「悪魔的なものをめぐる恐怖」が、その核心です。

第一のグループでは、作品の中心にいる怪物は、フランケンシュタインのつくった怪物とかキングコングとかゴジラよりはむしろ、私たちに似ている。ただ、その心的な資質の歪みのせいかそれとも我慢できないものになった圧迫のせいか、この存在たちは、私たちが新聞で（毎日、その日の分の強姦、人を不具にする暴力、サディスティックな殺人などを吸収するときに）読んでいるおぞましい行為を演じるのだ。このグループの中心的作品は、1960年公開のヒッチコックの『サイコ』であるが、その二年後にロバート・アルドリッチの『何がジェーンに起こったか?』で、独特の気味悪さをもった〈更年期障害の殺人〉ものとして知られるようになる典型的なヴァリエーションが有名になった。『ジェーン』ばかりでなく、『血だらけの惨劇』（一九六四）、『ふるえて眠れ』（一九六五）、『ファナティック』（一九六五）、『何がアリスおばさんに起こったか?』（一九六九）などでも老いた女優たちが身の毛もよだつような残虐なことをしたり、グロテスクなまでに責めさいなまれたりした。こうした作品では、傷をさぐることと傷につけこむことが、かならず重なってあらわれている。

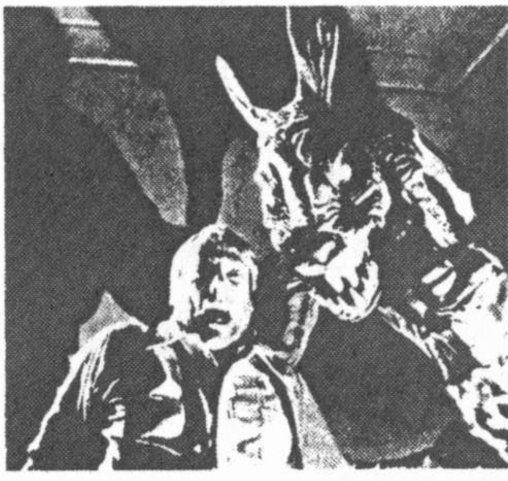
第2のグループ、すなわち「ハルマゲドン」のグループは、そういうことが実際に行われているにせよ、あるいはこういうおそれがあるというのにせよ、とにかく個人によるよりももっと規模の大きい破壊行為を強調する。この面でも新聞が（原爆がはじめて投下されていらい）例の生存の不安というものをたえず供給してくれているということがある。主要な作品にはすでにふれたSF映画のほかに、ヒッチコックの『鳥』（一九六三）がある。また、最近のものとしては、文明人が原始的な文化との接触をとおして自然をもっと理解しようとするのだが、自分のもっている文化が自然のバランスを狂わせて破壊的な結果をもたらしたあとでやっと深い理解を得るということをするどく描いたオーストラリア映画、ピーター・ウィアの『最後の波』（一九七八）がある。デリーによる第3の分類の悪魔的なものについても、私たちの新聞は、最近、神を崇拝するという伝統的な様式以外に吐け口を求める宗教的感情をもつ世界での悪魔崇拝の儀式や呪術や悪魔祓いを説明するなまなましい記事にことかかない。こうした現状を反映するこのグループの作品のなかで代表的なものは、「ルードンの悪魔」の物語を十七世紀のポーランドに移してつくったイェジー・カワレロウィッチの厳粛な白黒作品『尼僧ヨアンナ』（一九六一）であり、そして、英語圏ではでに大衆むけにつくった二作品、ケン・ラッセルの『肉体の悪魔』（一九七〇）とフリードキンの『エクソシスト』がある。ここで注意しておかなければならない。（中略）三つのグループのうち二つにおいて、なによりもサスペンス・スリラー（普通はホラー・ムービーとはみなされない）のつくり手として知られるアルフレッド・ヒッチコックのカメラから代表作が生まれているということである。このことはジャンルの流動性を示している（フィルム・ノワール（陰影に富み独特の暗い雰囲気をもったサスペンス・スリラー映画。ハリウッドやフランスのギャング映画で一つのジャンルとして確立された）がなかったら「人間の性格をめぐる恐怖」の映画はどうなっていただろう?またSFがなかったら「ハルマゲドン」映画は…）。 —S・S・P

■恐怖映画の技術の奇形学

ソシュール、レヴィ・ストロース、ピアジェ、ヤコブソンがほかの分野できりひらいた方法をその仕事に適用している、構造主義の映画批評家たちは、恐怖映画ないし幻想映画の魅力を二項対立という点から論じたがる。映画の奇形学は次のような対をなすものによって説明されるというのだ。〈正常〉—〈異常〉、〈心理的なモンスター〉—〈生理的なモンスター〉、〈行動するモンスター〉—〈苦しむモンスター〉、〈私たちに似ているモンスター〉—〈限度ぎりぎりまでわたしたちとちがっているモンスター〉、〈生まれたモンスター〉—〈つくられたモンスター〉、〈サイズの大きいモンスター〉—〈サイズの小さいモンスター〉、〈生〉—〈死〉、〈善〉—〈悪〉、〈美〉—〈醜〉、〈本能〉—〈理性〉、〈人間以外のものの人間化〉—〈人間の獣性化〉、〈自然〉—〈科学〉、〈人間的〉—〈機械的〉などである。こうしたやり方のもっとも有名な初期の例は一九三二年のトッド・ブラウニングの『フリークス』である。そこでは、私たちは画面にでてくる奇形の存在たちにはじめはひるんでしまうが、けっきょくはかれらを好きになる。映画が進むにつれ人間的で、人間としての内面をもっているのは彼らの方であること、そして本当に恐ろしいのは、かれらの宿命に巻きこまれている、力もあり姿としてもまともな二人の〈普通の〉サーカス芸人の方であることがわかってくる。こういうふうにやったあとで、ブラウニングは最初の調子に戻してしまう。彼らの仲間のひとりにたいしてなされた悪意の行為に激怒して、フリークスたちは危険な恐ろしい存在となり、異様な通俗劇的フィナーレで示されるすさまじい復讐をとげる。

アラン・G・フランクは、その、〈ホラー・ムービーズ〉という本で、ジャック・アーノルドの『縮みゆく人間』がやはり映画のモンスターのパターンをさかさまにしているのを具体的に示している。不明な化学薬品が主人公を縮ませてゆくうちに、飼っているペットたち（とくに猫）とクモが主人公のありったけの知恵と勇気を要するたたかいの末にやっと負かすことのできる恐ろしい敵になってしまう。「普通の人間が現代の科学とテクノロジーの武器がたっぷりとある、彼のよく知っている快適な環境に時放たれた巨大な生き物とたたかうのとはちがって」とフランクは書いている。「縮みゆく人間は知らない環境でかつては自分の日常生活のなかのペットだったり虫だったりした巨大なモンスターとむかいあうのだ」（〈ホラー・ムービーズ〉、一九七四）。歴史的な公正を期すならば、E・B・シュードサックの『サイクロップス博士』がこうした〈縮小〉効果のいくつかは先どりしていたことをつけくわえなくてはならない。しかし、それはアーノルドがこのよくできた作品でやっているよりもずっと創造力を欠いた使い方をしていた。シュードサック作品よりも三年前に、もうひとつのヴァリエーションと考えられるものがある。トッド・ブラウニングの『悪魔の人形』であり、そこではミニチュア化した人間がアレクサンドル・デュマの〈モンテ・クリスト伯〉に多くを負うプロットにおいて復讐の道具に使われる。もちろん、さらにずっと前の『ロスト・ワールド』の一九二四年版にも、そして『フランケンシュタインの花嫁』のもっとも効果をあげたグロテスクな場面にも、忘れ難いミニチュア化した人間が登場していた。

もうひとつの世界の供給、共通の



経験の地平の創造力による拡大は、観客が恐怖映画に求める大きなよろこびである。このもうひとつの世界、自分たちの世界とつながりはあるがちがうものである世界を一度経験したら、観客はその感じたよろこびの強烈さを増したあたらしいヴァリエーションによるものをふたたび得たいと切望する。拡大する経験にたいするよろこびは、ドラッグや狂気に歪められた世界の極端な異質化へと一時的に、映画館という安全さのなかで、突きおとされることからさえも生じる。『カリガリ博士』の歪んだ絵や建物、フランケンハイマーの『セコンド』（一九六六）の魚眼レンズによる視界といったものであり、さらにポランスキーの、性的な衝動が攻撃性に通じるという吸血鬼映画の主題を肉体的、性的接触への嫌悪がひきおこす殺人の衝動を示すことで裏がえしている『反撥』の、脅威感をどこまでもつのらせてゆく視界的世界がある。そうした創造のために、無気味なものを表現する独特の映画レトリックが用いられているが、さまざまな場合に応じて、斜めのカメラ・アングル、フィルターの使用およびぼかし、広角レンズによるディストーション、ローキーの照明、二重露出、コマおとしやスローモーションやストップモーション、赤外線フィルム、ネガフィルムの挿入、情調を表現するカラーおよびカラーコントラストの使用などがあり、さらに『キング・コング』や『サイクロップス博士』(一九四〇)や『縮みゆく人間』(一九五七)に代表される、ものの大きさの比率を変えるやり方があり、また、さらにムルナウ、ドライヤー、ホエールからブニュエル、ポランスキー、デ・パーマにいたる無気味な表現を得意とする作家たちによってはじめられたそのほかのありとあらゆる手法が、そのレトリックに入れられてきた。作家たちのなかには、フリッツ・ラングやジャック・ターナーのように、観客が部分的にしかみてないものを自分の想像で作りあげた恐ろしいことで補填するようにしむける暗示的な表現を使って仕事をするのを好む者もいれば、一方にはマリオ・バーヴァ（彼のイマジネーションは、少なくともターナーをはじめとするリュートン配下の監督たちが示しているものに匹敵している）のように、初期の映画作家たちが検閲にしいられてか、あるいはみずからの鋭敏な道徳意識からおさえたのか、親切なベールをかけていた残虐な行為や肉体のむきだしの状態や切断された状態をみせることで、意識的に観客にショックをあたえる者もいる。恐ろしいことは暗闇でおこるという伝統があるのか?よし、それなら、殺人を明かりのまぶしい浴室で犯させ死をまねく鳥たちを晴れた空から急襲させてやろうとヒッチコックは考える。現代の世界に解き放たれた海底十二万フィートの怪獣は敵であり、ほろぼされねばならないという伝統があるのか?それなら、ゴジラに地球が他の惑星からの科学技術的な脅威を撃退するのを助けさせ、そのときにゴジラの子どもがよろこんでとびはね、手をたたいているのを描いてやろうと本多猪四郎は考える。夜、明かりのついた家に近づいてくる黒衣の男のシルエットとそれがともなう影は、脅威と悪の接近を意味するという伝統があるのか?それなら、エクソシスト、悪魔に対抗する〈救済者〉をまったくそんな感じに写してやろうとフリードキンは考え、その宣伝スタッフは広告にくりかえしその写真を使うのだ。『サイコ』以降の映画では、アンソニー・パーリンスはとにかくどんなものであれ脚本家の要求する精神異常の若者を演じるという伝統があるのか?それなら、まったく健康な若いバトン・ガールのエッセンスといっていいおいしそうなチューズデイ・ウェルドと彼を組ませ、彼女のほうこそが本物の精神鈍の脅威であることを示してやろうとノエル・ブラックは『かわいい毒草』(一九六八)で考える。おなじような遊びは、『幽霊物語』（一九七四）でスティーヴン・ウィークスによってもおかなわれている。そこで彼は、その超自然的な殺人の物語をP・G・ウッドハウス的な雰囲気のなかに持ちこみ、子供の人形を殺人の凶器にしている。また、イェジー・スコリモウスキーによっても―彼は『叫び』の主人公に、クリケットの試合のスコアをつけさせながら、その恐ろしい物語を語らせている。ほかの芸術とおなじように映画でも期待をひきおこし、裏切り、そしてまた方向づけをしなおすという遊びは、ジャンルが発展してゆく主要な方法のひとつになっているのだ。

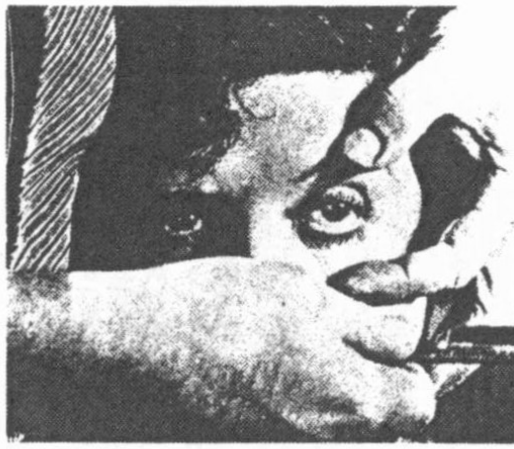
—S・S・P



②サウンド・オブ・サイレンス

マムーリアンは『ジーキル博士とハイド』（一九三二）のサウンド・トラックに、増幅し、速まわしにした心臓の音や逆回転にしたゴングの音を入れたり、直接、光の波形を焼付けたりした。エイゼンシュタインの『アレクサンドル・ネフスキー』(一九三八)は壮大さとともに恐怖という面でも訴える力を持っているが、チュートン・トランペットにマイクをくっつけて録音してほとんど肉体的な苦痛をあたえるような雑音をひきおこしている。ソロルド・ディキンソンの『スペードの女王』（一九四八）の姿のみえない幽霊は、絹ずれの音と杖の音でその存在を告げている。ヒッチコックの『サイコ』のクライマックスには、バーナード・ハーマンのバイオリンが悲鳴のような音をたててとおりぬける。ジャック・クレイトンの『回転』(一九六一)は絶えまなくささやき声がしみとおっている。ロバート・アルトマンの『イメージ』(一九七二)の魅惑的な雰囲気がマッチして効果をあげている。サウンドの出現はまた、画面とセリフを体位法的に用いるというあたらしい可能性をもたらした。アレクサンドル・アストリュックの『陥穽と振子』（一九六二)で、画面がポーの想像し記録している事件を、異端審問の拷問者の視点から示しているときに、サウンド・トラックからはもとになったポーの短編（拷問をうけた者の視点をとっている）の朗読がきこえる―

あとは、作曲家が恐怖映画にもたらす最大の恩恵のひとつは、静寂にたいして枠を用意することだというころをつけくわえておけばよいだろう。カール・フロイントの『ミイラ再生』のカーロフの有名な〈小また歩き〉をつつむ気味の悪い静寂や、リュートン・ターナーの『生と死の間』でヴードゥーの儀式のドラムによってのみ破られる静寂。どんなに多くの量の壮麗に鳴りひびくものも、言葉とともにすべての音楽の伴奏が突然に消えてしまう気味の悪い効果には匹敵しえないだろう。ベルマインの『野いちご』の最初の夢のシークェンスがナレーションではじまった直後に突然、薄気味悪く訪れる無音の状態のような、意味をもった沈黙の出現である。ベルマインのそのシークェンスは無気味な効果の映像のアンソロジーとみなすことができる。針のない時計、誰もいない通り（歩いていた人物がふりかえると顔の痕跡しかみえず、さらに溶けて消えてしまい、地面には衣服だけがのこる)、棺を落としていく霊柩車（その棺がひらくと中には、夢をみているものの分身、ドッペルゲンガーがいて、その手が夢を見ている者の手をつかんで棺の中にひきこもうとする）―これは、ベルマインが映画および文学の恐怖映画のたいしてくりかえし意識的にささげている敬意の



しるしの一端である。

—S・S・P

③"バス"或は"ポップアップ"

「われわれは、そうした作品をとても真剣に考えていたんだ。長い時間をかけて一生懸命やったからね、われわれの水準は非常に非常に高いものだったんだよ。『キャット・ピープル』に私がもたらしたものは、編集の技法のなかにあるんだが、あれはかなり素晴らしい編集だった。われわれはあとで〈バス〉と呼ぶようになる鋭いカッティングの技法を開発したんだ。『キャット・ピープル』でそれをはじめて使ったんだが、おびえながら通りを走ってくる娘のクローズアップから、大きなエア・ブレーキのシューっという音をたててとまるバスへとカットしたやつだ。このカッティングの鋭さは、劇場の座席の人々が椅子から落っこちたくらいのものだったんだよ。われわれはしょっちゅう、これをやろうとした。〈バス〉は『恐怖の精神病院』でも、独房から手が突きだすところでやった。それから『第七の犠牲者』ではおびえたジーン・ブルックスが路地の壁に這いつくばるようにしてやってくると突然、だれかがけたたましく笑う声がするというところでそれを使った。恐怖のシークェンスのあとで、われわれはいつも観客にほっとさせるもの、非常に美しいもの、できれば抒情的なものを褒、もってこようとしていたね。われわれは映画を見ておもしろいものにしようとしたんだ…」

—マーク・ロブソン

もちろん不意打ちのショックは、恐怖を喚起するもっとも重要な要素のひとつである。「魔的なものは、突然のものなのだ」とキルケゴールも《不安の概念》で言っている。マーク・ロブソンの言葉が示しているように、恐怖映画のつくり手たちはつねにこのことに気がついていた。しかし、かれらは自分のやっていることがわかっていたとすれば、〈対比〉の重要性についてもそれに劣らず気がついていたはずだ。ポール・ウィリメンは、ロジャー・コーマンがそのポー原作の作品群のシークェンスをショック効果（つまり、突然の出現、突然の変身、悲鳴、物の落下、破壊ないし爆発、急激なカメラの動きと画面の中の動きとの組み合わせ）を中心に組みたてていることを論じたとき、正しく次のことを説明することを忘れていない。そうした効果が、コーマンとその撮影監督フロイド・クロスビーがそうした効果をうずめこんでいる作品の語りのほかの部分ののんびり君のペース、ゆっくりしたパン、催眠的なトラック・ショットやドリーショットから力を得ているということである。アルフレッド・ヒッチコックは、実に作品ごとに、ゆっくりと冷酷に緊張をつくりだしてゆくことのほうが、思いがけない恐怖がいきなり侵入してくることよりもどれほど多くのことをもたらすか示している。

—S・S・P

『アンダルシアの犬』は、犠牲者になりたいという私たちの気持ちを利用した最初の映画であるかもしれない。私たちの感情は目をとおしてはいってくるあらゆるものにさらされている。そして私たちは、五〇分の一秒のうちに、それを回避するにはあまりにも突然にイメージがおきかえられるあらゆるカットのなすがままになっている。いくつかの並列はまったく暴力的である。シャワーをあびる娘—ナイフを持った侵入者、というように。しかしすべては内在的な意味でショックをあたえるものなのだ。いつでもカットはおこりうるし、どんな脅威をももたらしうるということを私たちが知っていることが、不安を確実にする。

—ディヴィッド・トムソン

読書は親密な行為、作家と読者の想像力の共有である。小説の主題がわれわれの最も奥底にある、最も暗い恐れにかかわりあうとき、感動が高められることは疑いがない。作家が露骨な描写にのめりこみ、恐怖を詳細に説明すればするほど、(映画監督のように）できあがった画面を提供する結果になって、想像行為を共有するたのしみを読者から奪いとってしまう。

しかし、最近のホラー小説に見られる、露骨な描写を多用する傾向には、もっと基本的な理由から疑問を投げかけたい。ホラー小説の目的は読者にショックを与えて服従させることだという前提で書いている作家、"残酷シーン"の調達者があまりにも多すぎる。彼らが耽溺しているのは、映画作家が"ポップ・アップ"と名づけた安っぽい戦術—とつぜん視野に突きだされる手や、損壊された死骸のクローズアップなどである。しかし、ショックは非理知的な経験、感覚の過負荷であって、たいていの人間はすみやかにそこから回復してショック・カットや突然のズームインは、いまでは完全な常套になってしまっており、私達の多くはもっと穏やかな技法にかえって安心して反応する。ベルイマンの『第七の封印』やアンリコの『ふくろうの河』の、カメラにむかってくる人物にたいするカメラの無気味なすべるような動き、ラングの『飾窓の女』のショーン・ベネットの影がそのポートレートのよこに魔術的に浮かびあがるところ（恐怖の暴力的なはじまりとかぞっとしたたじろぎというよりは無気味なものにたいする身震いをひきおこしている）、といった技法である。近年では、ワイド・スクリーンの映像機と被写界深度を使った撮影が、エイゼンシュテインとベンヤミンがそれぞれちがったやり方で明確にしたショックの美学を打ち消すような役割をはたしてきている。とはいえ、不意打ち的なやり方、突然の侵入、突然の並置はつねに恐怖物語映画になくてはならない要素でありつづけるだろう。『鳥』の両目をえぐられた男のときのように」とヒッチコックはピーター・ボグダノヴィッチに語っている。「カメラをズームインさせておいて—画面のコマをパッパッパッととばすとほとんどはっと息をのむようになる。そうだろう？そう、ぎくっ、ぎくっとね。

■紸和訟嘔

『半魚人』における性的、神話的ポイントは、ケイをものにすることがまた必然的にモンスターの悪魔的な脅威に直面し打ちかつことになるというところにある。ところが『ローズマリーの赤ちゃん』と『エクソシスト』（私はこれらをウォーターゲート時代のホラー・フィルムと呼びたい誘惑にかられる）では両方とも、恐怖のポイントは、モンスターが娘（この娘をいかにとりかえすかを映画は追求する）を性的に支配することをなしとげてしまっていることにある…。最悪のことがすでにおこっている…娘は支配されている…。

量産、集中宣伝、試みてうまく行った方式の徹底的利用が、恐怖映画産業の、つねに目につく特徴となってきた。ハマーがその種の作品のマーケットの存在を示すと、世界中の会社がその動きにとびつき、吸血鬼の、モンスターの、〈死体再生〉の映画をつくった。『エクソシスト』がヒットすると、世界中の会社が、悪霊憑きと三百六十度開店する首やなまなましく撮った腫れものや嘔吐を組み合わせた映画をつくった。こうした過程において、約束ごとはステレオタイプに、展開は恥知らずな模倣や創造性を欠いた「一枚うわてを行く」に、恐怖は肉体的な不快に、そしてジャンルは定式になりさがってしまう傾向があった。恐怖を描き喚起する多くの映画が、みかけだおしに組みたてられ、その意識の姿勢においては、(肉体的な不具と精神や魂の不具の安易な同一視にふけったり、あるいはまぬけな〈ヒーロー〉に〈狂った〉科学者にたいするあまりに安易な勝利をあたえたり、あるいは惰性的に本や芸術作品の愛好と犯罪性を結びつけていたりというように）愚かであり、そのセリフにおいては常套を踏み、その演技においてはぎこちなく、その道具立てにおいては非芸術的であることは疑えないところだ。血なまぐさい暴力と刺激的な裸をテ

クニカラーで見せて観客のサディズムな、のぞき趣味的な性向をかきたてるためにジャンルのパターンを利用する、そういうタイプのホラー・ムービーがあり、オールナイト上映の番組を組む映画館の経営者に大いに好まれている。ほかのジャンルもおなじような目的に使われてきたが、恐怖物語映画はとくにやすやすとそういう目的に利用されてきたのである。こうした面では用心の必要がある。病んだ精神や過敏症の神経には、激しく動揺をひきおこすイメージはその病気を悪化させたり、その不安の夢にはいりこんだりすることがあるというばかりでなく、精神は過度に粗野や暴力にさらされると、美意識の面ではもちろん、モラルの面でも危険な段階まで麻痺させられることがある。カタルシス効果の見地からする議論には限界があるのだ。私達の社会の健全さは、かなりの程度まで、私たちは自分に芸術とそれにたいする私たちの反応に審美的かつ道徳的判断をくだす習慣をつけることにかかっている。私たちがそれまでの許容のレベルをこえているようにみえるシーンに驚かされるとき、私たちはそのシーンをそのコンテクストにおいて考え、作品全体の思考と感情の動きがその当然の帰結としてそのシーンを必要としているかどうかを自問してみなくてはならない。「私たちの知性がほとんど歩みをあわせることができないほど速く変化してゆく世界において、私たちに安らぎを感じさせること」が芸術の役割のひとつであるというゲーテの確信について語っている。これは私がトルストイ的真実と呼びたいと思っているものである。その力を感じることなしには、どんな芸術も長くにわたって研究することなどできない。

しかし、カフカ的真実というのも存在する。それは、安らぎを失った感覚、未知と方向喪失のはっきりした感情に焦点をあて、私たちのめざめている意識のカテゴリーには容易に同化しえない存在の秩序の可能性に私たちを気づかせておくような作品を私たちは必要とするという。

—S・S・P

すぐれたホラー小説は、ショックよりも感情を重視する。それはわれわれの皮膚の下に食いこみ、いつまでも心の中にとどまる。前後関係があってはじめてイメージが生きてくるという、なによりの証拠である。デニス・エチスンやM・ジョン・ハリスンといった文章家は、たゆたう影、あるかなきかのしみから、たいていの〝スプラッタ〟映画が何ガロンもの血糊で作りだすよりも強烈な恐怖を醸成することができる。その力―たんに怖がらせるだけでなく、読者を動揺させ、本を閉じたあとも長く余韻の残るような謎を呼びおこす力―が、ここに収録された作家たちの顕著な特徴である。

—D・E・W



F　今回なにがうれしいって、昔から大好きだった「王家の紋章」の小特集が組めたこと。

S　細川知栄子先生には漫画の手帖を毎号お送りしてるんでしょう。

F　なにしろ「泣くなパリっ子」以来の大ファンですから、次回はぜひインタビューをお願いしたいと思ってます。

S「花嫁衣装はだれが着る」とか、いわゆる大映ノリのTVドラマシリーズって、実は細川先生の原作のものが多いんですよね。ふくやまけいこさんや高橋留美子さんなんかも細川先生のファンだって話しだし。

F　少女マンガの原点のひとつがここにあると言って良いでしょう。ところでアナタ、最近すごくつかれてない？

S　うん、この本を一冊仕上げて、そのあとが48ページにPRをのせた「漫画の手帖増刊VANDA」でしょ。2冊連続だったからきつかったなあ。

F　アナタは以前にも、それで入院したコトがあるから気をつけなきゃ。漫画の手帖は、仕事や使命感で出してるワケじゃないんだから、もーちょっと気楽にやった方がイイと思うよ。ぼくなんて、31号と別冊8号の追いこみがモロに重なった6月のシュラ場に、一家でホンコンに行ってきたし、花博も行ったし、今年はサンリオ・ピューロランドを予約してます。娘のために。

S　自分が行きたいからじゃないの。花博はどうでした？

F　奈良のシルクロード博が、あまりにひどかったので、それほど期待してなかった分だけ楽しめました。やっぱり富士通の3D映像はスゴイ！一才の娘もみじろぎもせずに3Dメガネにかじりついてました。こんどはぜひ、奥サンと子供連れていっしょにサンリオ・ピューロランドに行きましょう。キティちゃんやけろけろけろっぴの舞い踊る夢の国に行けば、つかれなんかふっとびますよ。

S　漫画の手帖とは直接関係ないんだけど、7月から8キロもやせてしまった。まあ今がちょうどいいから良いけどね。

F　そうね、ベルトの穴ふたつくらいかな。でもダイエットだったら体によくないから、やめた方がいいですよ。

S　ちゃんと食べるには食べてるんだよ。ハンバーガー食べある記も缶ジュースも、全部自分で飲み喰いしてるんだから。そうだ。ライブハウスやコンサートの行き疲れというのもあるかもしれない。月に4～5回は行ってるから。

F　それって夜アソビが過ぎるんじゃないの？　たまには早く帰って二人の息子とおフロに入りなさい。

S　たしかに最近はテレビも見ないなあ。くだらないものが多いし。だからプロ野球も見ない。今年は一試合全部見た事は一回もなかったもの。日本シリーズでは巨人がボロ負けしたけど、一度も見なかったし、とりたてくやしいとも思わなかった。

F　次からは、ハンバーガー食べある記のような企画は、若き有能な新スタッフに全部おまかせしてですね、我々は奥サンと子供連れてサンリオ・ピューロランドに行きましょう。

S　ウチは男の子二人だから、キティちゃんとケロケロけろっぴの舞い踊る夢の国はちょっと。

Fじゃあ常盤ハワイアンセンターでもいいや。最近は近藤さんがワープロうってくれるので、ずいぶんと楽になったものね。

S本当に32号は、新スタッフの近藤さんが大活躍だったよ。企画や取材もほとんど手伝ってもらったから。そういえば彼女も5キロやせちゃったらしい。もともとやせているソチラを含めて3人共スレンダーですねえ。自慢にならないか……。

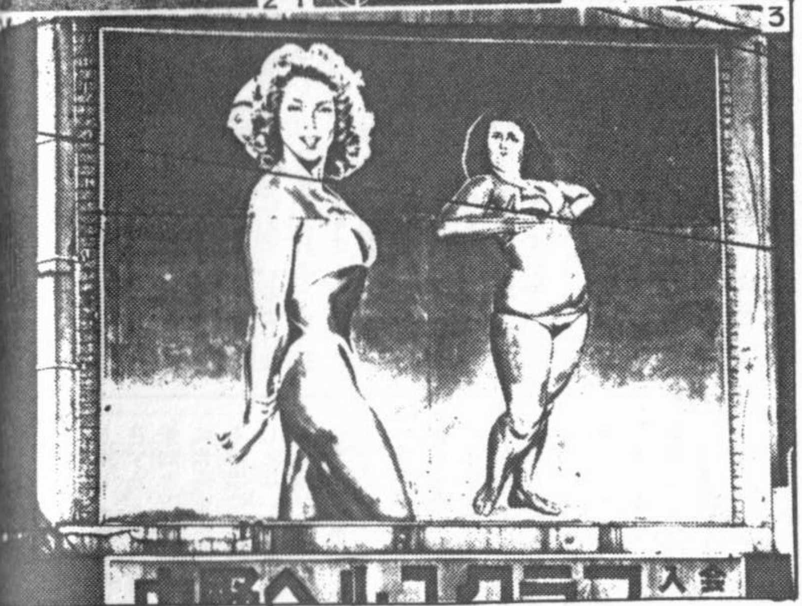
Fぼくはよく食べるのに太れない。体質もあるんじゃないかな。某ゼネプロの重役の方々がうらやましい。

S漫画の手帖とゼネプロの体質の違いを、身をもって体現してるみたいですね。というわけで、VANDA、通販しているので是非買って下さい。イベントでは売るけど書店売りはしませんよー。

Fこんど奥サンと子供連れてディズニーランド行こうね。







中野ヘルスクラブのヘンなカンバンの秘密を推理すると―
グルメ班にひとこと!ハトの肉は、おいしいのです。

◆私の住む仙台の、それも市内のド真中に、体長8mはあろうかという巨大な彫像が立っています。いったいこのビルのオーナーは大金をかけて、なんでこんなものを作ったんでしょうか??

★写真1(仙台市・浅川満)

㊥私の住む三軒茶屋にも、かの有名なゴリラビルがあります。こっちは夜、目が光るぞ。

◆先日、中野へ行く途中でこのカンバンをみつけました。ヌード劇場かと思い、なるべく早く通り過ぎようとしましたが、入口にあるへんなオジサンが目にとまりました。(見とれていた訳ではありません。決して!)で、付近を廻ってみると、カンバンは中野ヘルスクラブというジムのもので、隣りが中野ヒカリ座というとても古いポルノ映画館で、なんとなく納得できました。さらに振り返ると、カンバンの横の窓に、逆三角形の体形の男の人のシルエットが動くのが見えました。ん……SMクラブ……?

★写真2・3(横浜市・有賀智恵)

㊥たぶん中野ヒカリ座のカンバン描きに来た人に、ついでにたのんで描いてもらったんでしょう。不自然な空白部分に、例えば「禁断のオッパイ狩り」とか「みだらな性春」とか「獣の戯れ」とか豪華3本立て!!とかの文字を入れてみると、さらに納得できると思います。

◆グルメ班の皆様にひとこと。ハトの肉はおいしいのです。まずかったとしたら、①ハトそのものが悪質なエサを食っていた(ドバトをつかまえてその肉を売っていたりして)②料理の仕方が悪い(鉄板焼にでもしたのでしょうか)ということだと思いますが。油が多かったとのことで、逆にうまいものを食い過ぎのハトかもしれません。ハトは炭火で焦げるくらいに焼くとおいしく食べられます。タレにつけてもいいが、塩焼がいちばんです。理想を言えば、自分で射ち落として、羽根をむしりとり、解体するようにすれば、もっとおいしく食べられます。まあ、だいたいは養殖でなく、野生の動物の方が絶対にうまいですよね。今度は、山椒魚なんかにも挑戦してみてください。栃木県の一部では干物にして販売しています。そのうち送りましょうか?(栃木県那須郡・益子浩資)

㊥ハトはアミ焼きにしました。あなたは射ち落として食べてるんですか? 山椒魚はドリアンキャンデー(シンガポール製)と交換しましょうか?後悔しないなら。

◆この夏「漫画の手帖'90夏」を読ませていただき「夏の花火」がぜひ見てみたくなりました。ビデオのコピーお願いします。(杉並区・渡辺一司)

㊥ダビングしたテープ送ります。この本、即売会のみの発売(50円)買って下さいね。

Q&A

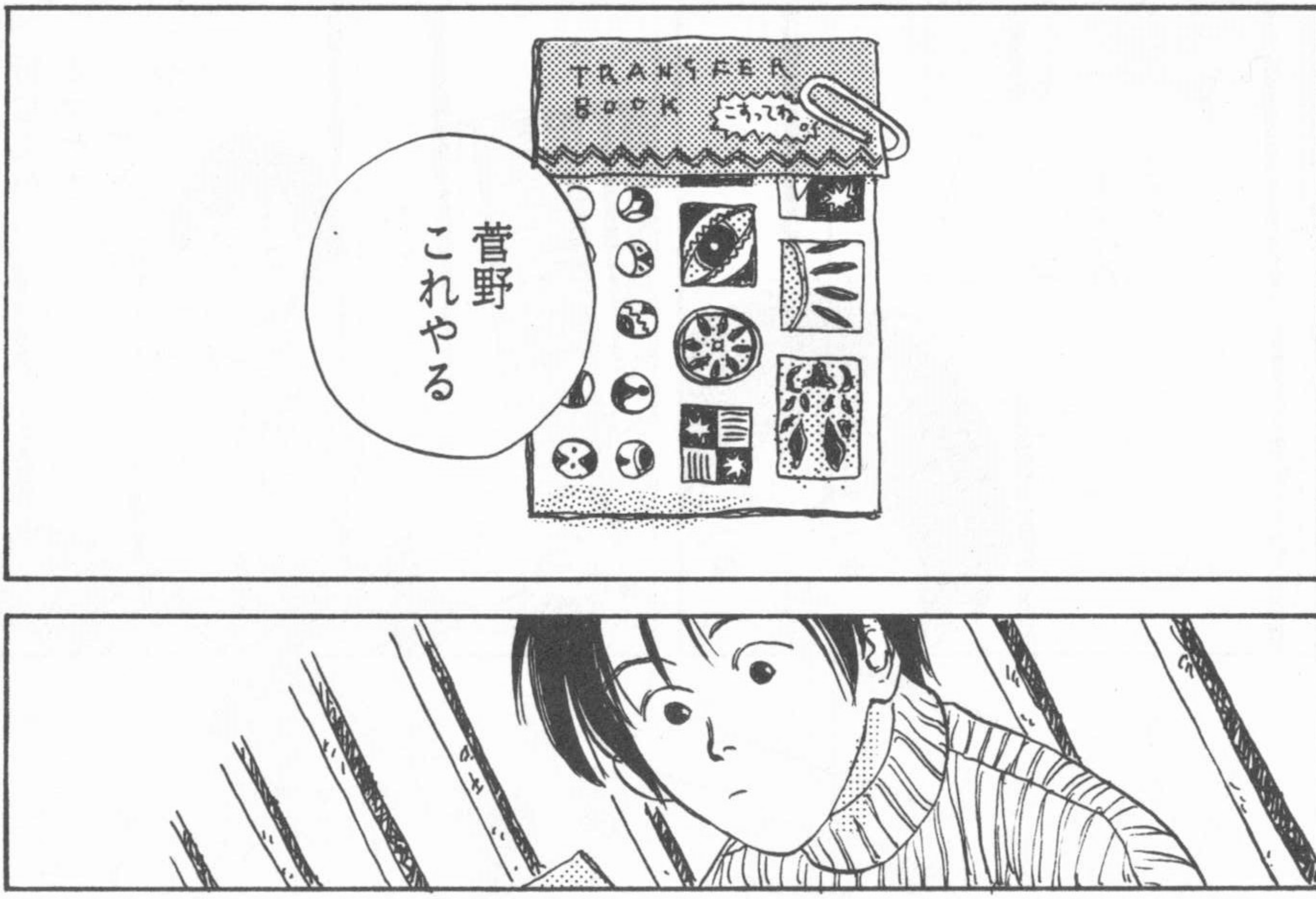
◆昔モノクロで放映していた「も～れつア太郎」のケムンパスとベシの声優さんを教えて下さい。(東大和市・室伏智恵子)

A ケムンパスはグレートマジンガーの剣鉄也の声の野田圭一さん、ベシは団兵衛の声などでおなじみの富田耕生さんです。(池田憲章)

◆たしか昭和43年のマーガレットに前後編でのってたんですが、「モゲの白い花」というマンガの作者を教えて下さい。(世田谷区・真島光)

A 東口裕子さんが昭和51年の週刊マーガレット38.39号に描いた作品ですね。コミックスにはなっていません。(杉田健一)

◆漫画の手帖購読ご希望の方は、5回分の購読料1500円を、①小為替で〒167東京都杉並区上荻2-27-18藤本方・漫画の手帖事務局へお送りいただくか、②郵便振替で、東京7-69599・漫画の手帖事務局あてにお送り下さい。何号からのご希望か、必ず書いて下さいね。バックナンバーは、22号、24～27号、29～31号があります。①②の方法で1冊送料込みで300円、2冊以上の注文は、冊数×150円+200円(送料)でOKです。よろしく!



ラブ・ミー・テンダァ

南Q太




昔なんかのオマケでついてたやつ
こすってはるやつだ
へえ
ケッコンするんだぼく
岩田が？いつ？
さらいげつ
とつぜんだね
なんか子供できたみたいだって


帰ろ


マツムラといいます
菅野さんでしょ？今日子からよくきいてますよ
今日子？
ああ岩田のことか
ちょっとまってね
もしもし
あ岩田？あのさ
課題レオちゃんのB4明日提出だっけ？
うんそう
そっかそいだけサンキュー


あ マツムラがさ
え?
こんど一緒に どっかいこうって 車で
わーい やったあ
そいから あのシールね
大事に とっといてたヤツ なんだ
ふーん
すぐ つかっちゃう よ わたし


いーよ 別に
ふーん
岩田
……
別にどこも いかないん でしょ?
別に ずっと うちいるし
よかった


またね
また明日ね
こすって
うんと
こすって
そうっと


てらてら
してる
……
しまった
カルトンに
貼るんだった
おわりだよーん

下北沢かたゆでたまご



by・たきたかんせい

私は、CXTVの「カウントダウン10」をよく見ます。有名人やタレントが、自分の好きなもののベスト10を上げるという単純な番組なんですが、これを見るとその人物の知性や教養がたちどころにわかってしまう。
例えば、千堂あきほは馬鹿です。悪役・八名信夫氏の「甘いものベスト10」や、森口博子の「腕時計コレクション」(彼女は、腕時計を「ハメる」、と繰り返し言っていた。良い事だ。)、ベンガルさんの「自分のケガベスト10」など、色々な人が自分のこだわりを披露する中、彼女は「漬け物ベスト10」をやりました。
これの中身がひどかった。
銘柄や製造元の指定は一切無しで、「らっきょう」「奈良漬」「福神漬」「たくあん」ときたもんだ。
幼稚園の子供に好きな食べ物を聞いても、もうちょっとマシな事を言いますよ。
彼女と一緒に暮らす男性に、同情の念を禁じえないのであります。
さて字数稼ぎを一枚したところで、皆さんにはもうお分かりでしょうが、今回はネタが無いので、「ブックスおりーぶの訪問者ベスト10」をやります。

第10位 「山本さん」
年齢は30才前後、独身。
下北沢の車庫付きマンションに住み、ドカティを300万かけて改造しレースに出る。
職業は不明。
行きつけのコーヒー専門店の店員を自宅に招き、自分の入れたコーヒーを飲ませて、
「これが本当のコーヒーだ」
と宣言したりする。
しかし、山本さんは頭の皮が動く。
店内で本を読みながら、或は又レジでお金を払う間にも。
山本さんは、短めに刈った髪を、狭い額を、絶え間無く、そして時に激しく、前後に動かす。きのうは3回だけ動かした。

第9位 「Kさん」年齢は40才前後、恐らく独身。
眼鏡を掛けた物静かな男性です。
サイエンスライターの鹿野司氏も驚く、難解な専門書をお求めになります。
あの時、私はKさんの御注文の本が届いたので電話をしたのです。
それまでは、お勤め先に連絡していたので御自宅に電話をするのは初めてでした。
3回の呼び出し音の後、留守番電話のテープが回り始めたことを示す一瞬の間。
聞こえてきた音を聞いて、私は受話器を落っことしそうになりました。
Kさんのものらしい異様に低い声で
「ワ・タ・シ・ハ・ル・ス・バ・ン・デ・ン・ワ・デ・ス。ゴ・ヨ・ウ・ノ・カ・タ・ハ・シ・ン・ゴ・ウ・オ・ン・ノ・ア・ト・ニ・メ・ッ・セ・ー・ジ・ヲ……。」
しかも、小学生がロボットの声を出す時とかに使う、例の(超古典的な)「胸叩き声」である。
その後私がまともに話せなかったのは言うまでもありません。
そんなKさんにも、恋人ができました。
25才くらいの背の高い美青年です。
連れ立って二人で買い物する姿を見ると、いつまでも日本が平和な社会でありますようにと祈らずにはいられないのであります。

第8位 「かりあげさん」
この人のことは前にも書いたことがあると思います。
50がらみの背の低いおじさんです。
「これいくら?」
店のどこからか突然声をかけてきます。
注目すべきはその頭です。
頭頂部には丁寧に撫でつけられ、短く刈り込まれた髪。
しかし側頭部には、無い。
髪の毛が。
一本も。
後頭部側面も同様です。
この方は、元々側頭部及び後頭部に髪の毛が育成しないという不幸な境遇にあらせられるのであろうか。
否!近くば寄って目にも見よ。
嗚呼、そこには青々とした、見渡すかぎりの無数の毛根の数々。
側頭部無毛状態というのは単なるおじさんの趣味だったのであります。

「第一幕第一場『書店・ブックスおりーぶ』における美本マニア山口のモノローグ」
「田沼意次からの通信、今日も下北沢の書店にて受信」
「ここにくるとあたしはもう一人のあたしと逢うことができるの」
「声に出して言ってみるテレパシー」
本屋はこのような「独り言の人」の楽園なのです。
そんな方を何人かご紹介しましょう。

第7位 「ブツブツの男」
店の入り口から、にぎやかな「話し声」が聞こえてきました。
眼鏡を掛けた大学生風の男です。
楽しそうです。
もちろん一人です。
「会話」の内容は聞き取れません。
『ドラえもん』を手に取りました。
何か言ってます。
「ブツブツ、ブツブツ」
「ブツブツ」という言葉を声に出してブツブツ言っています。

第6位 「造反有理の人」
例によって、店の入り口からにぎやかな話し声が聞こえてきました。
楽しそうです。
『ドラえもん』を読み始めました。
ここまでは「ブツブツの人」と全く同じです。違うのは、眼鏡無し、小太りのその容姿だけです。
「うふっ、うふふっ、」
絶え間無く笑います。
本当に楽しそうだなあ、と思ったその瞬間でした。
クルッと振り返って私を見ると、
「造反有理って何ですか。」
突然の質問に驚きの余り何も答えられず、ただ視線を合わさないようにしていると、彼はもう『ドラえもん』の世界に戻っていました。

第5位 「パジャマの怪人」
この人の事も前に書きました。
1年中、同じパジャマと背広で(冬はその上にオーバーを着る)、手の甲が黒くて手のひらが白い、いつも何事かを呟いている。例のおじさんです。
しかし、最近やつれてきたのが心配です。
健康にはくれぐれも注意してくださいね。

第4位 「スマイリー小原さん(本人)」
お亡くなりになってから、もう随分経ちました。
いつでもお化粧ののりのよいお顔、何回お教えしてもお分かりにならなかった『カー&ドライバー』の売り場。
何も彼もが懐かしく思い出されます。

第3位 「物貰いのおばあさん」
又々、使い回しのネタで申し訳ありません。この人はお客さんではありません。
いつも凄いお化粧(と言うよりは白塗り)をしています。
今年も来ました。
しかし今度は入り口のところで若い女性に物乞いをしただけで諦めて出ていきました。

第2位 「子ども警察」
電話がかかって来ました。
「おりーぶですか?」
大人のふりをした子どもの声です。
(或は子どものふりをした大人か)
「こちら捜査課ですが、…」
「……。」
「お宅で万引があったらしいんですがね。」
黙っていたら切れてしまいました。
又一つのじけんがオクラ入りになってしまったのです。

第1位 「夕焼け番長」改め「太宰の男」
いつでもいちょうの葉っぱを口にくわえている人でした。
朝10時頃になるとやってきて、店を一周すると、何も買わずに、下駄の音を響かせて出て行きましたね。
あなたのくわえている葉っぱが色付くともう秋。
でも、真冬にくわえていた葉っぱはどうして手に入れたの?
冷蔵庫にでも入れて置いたのかしら。
渋カジの雑踏の中の「夕焼け番長」。
友達が見ました。イカシてた、そうです。
あの日、初めてサングラスをかけて店に現れたあなた。
「葉っぱをくわえた変な奴がいたでしょう、あれが僕なんです。」
わかるに決まってるじゃない、あんなに目立つ人なのに。
でもあの日からあなたは変わってしまった。そう、あなたは「夕焼け番長」改め「太宰の男」。
いつも、太宰治の文庫本をポケットに突っ込んで肩を丸めて歩く。
力なく、今にも自殺しそうに。
あなたは、なり切る人、ハマる人。
ひょっとして、次は「ねじ式男」か。
「もしもしこの近所に医者はありませんか。」などと聞かれても私には答えられない。
あなたはいい年をした中年のおっさんなのだから。
と言う訳で何かだらだらと長くなってしまいましたが、これで終わりです。
「追われるおばさん」については又の機会にお話ししましょう。





ドムドム

［えびバーガー］

えびのパティ、レタス、ピクルス、タルタルソース

　えびの味はしないよ。えび風味のフィレオフィッシュのちょっとかたいやつって感じ。味はぼけてる。レタスがべしょっとしてて物悲しい。全体的に大味。

★52点

ラブ

［オムレツバーガー］

ハンバーグ、オムレツ、ベーコン、オニオン、ケチャップ、マヨネーズ

　まずくないけどバンズも卵も甘くてくどい。オムレツが不協和音を奏でている。ラブ特有の薬臭さがある。いったいどこにベーコンがあったんだろう。　★57点

・ドムドム・
水色で.切りかえしが灰色.
若い娘には
似合わない.
もうちょっと
なんとかして
ほしいですね

アービーズ

［ローストビーフバーガー］

ローストビーフ、レタス、マヨネーズ

　マヨネーズが美味い。かな。　★50点

［ターキーデラックス］

ターキー、レタス、トマト

　レタズが千切りになり過ぎて、口当りが悪い。トマトも何だか味にしっくり来ないなー。これはターキーよりチキン入れた方がおいしいんじゃない？　★22点

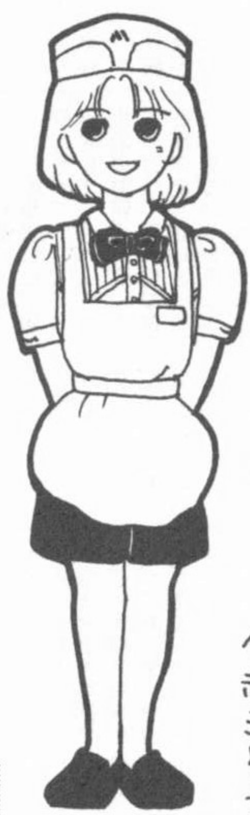
［ビーフ&チェダー］

ローストビーフ、チェダーチーズ

ゲロの味。

★10点

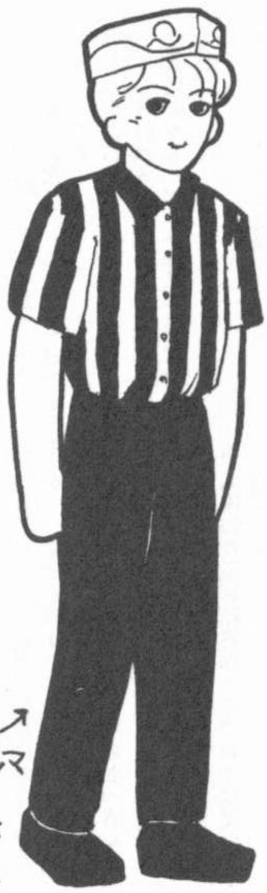
・ラブ・
ピンクとベージュのあわいチェックのベストと.うすピンクのブラウスとスカート。
とっても上品な色合せ。
でも.ちょっとでも汚れていたら.目立つ服.



・モスバーガー・
白と紺のはっきり.かっきりした.かわいらしい服.
エプロンが丸くて良い.
かための布でできたタイが全体をひきしめているのかな.

・ロッテリア・
今回のNO.1ヒット.
赤いブラウスに茶色のミニジャンパースカート.
そして真紅のタイ.
かわいいぞ〜.
ぜひ見に行きましょう.





モスバーガー

［モスバーガー］

ハンバーグ、トマト、レタス、特製ソース

　トマトが輪切りで新鮮でおいしい。ハンバーガーを食べていると思えないほど味が完成している。バーガーの部分も美味い。　★98点

ロッテリア

［カイザーサンドグリルチキン］

ペッパーチキン、トマト、レタス、マヨネーズ

　これはなんだか中途半端な味だね。バンズが湿っててサンドイッチみたい。マヨネーズとペッパーの割合が悪いよ。けっこう良い線だけどものたりないね。

★70点

・アービーズ・
オレンジと白のシマに茶のズボン.
似合っている人はいませんでした.

ハンバーガーたべある記 & ユニフォーム見てある記

by 漫画の手帖グルメ班



マクドナルド

［ダブルチーズバーガー］

チーズ２枚、ハンバーグ２枚、ピクルス、タマネギ、ケチャップ

　単純な作りだけど美味い。ファーストフードのお手本だね。本家といった感じ。素材がいいんだろうね、味のバランスもとれてる。

★９６点



ウエンディーズ

［チキンフィレバーガー］

フィレカツ、レタス、タルタルソース

　ペッパーが効いていて美味い。
でもこれは家でも作れる気がするぞ。フィレが薄くて情けないところがケンタッキーに負けているかな。

★６２点

ファーストキッチン

［カツレツバーガー］

カツ、レタス、タルタルソース、ソース

　これは懐かしい。昔手作りのパン屋とかで売ってたカツパンそのものだよ。でもタルタルソースの分だけ味がマイルド。惣菜屋でカツ買って来て自分で挟めば出来るよ、これ。わざわざもう一度買いはしないかな。

★６７点

［パイナップルバーガー］

エビコロッケ、パイン、タマネギ、タルタルソース

　うーん。油が悪いよ。その上パインが甘くて味にしまりがないの。胸が悪くなる。パインで、べしょべしょしちゃってる。

★３０点

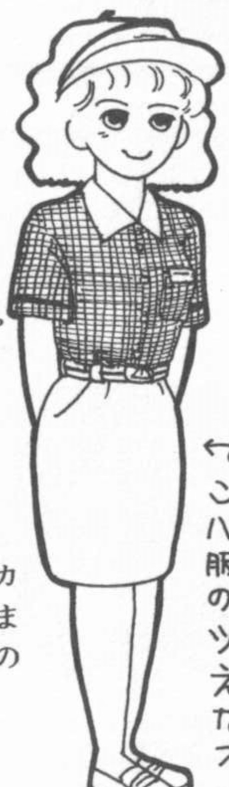


サンテオレ

［チキンクラブ］

鳥のからあげ、ベーコン、レタス、トマト、マヨネーズ

　とっっても油っぽい。からあげがしょっぱいうえにカラッとあがっていないし、マヨネーズがあたたかくてまずい。あー胃に重いね。これは子供のころ昨日の晩ご飯の残りでてきとうに作ったサンドイッチだ。★２０点



缶ジュースのみある記



タヒボベビータ　（ＪＲ東海）
インカ帝国の時代から"神からの恵みの木"と崇められてきた「タヒボ」のお茶だそうだ。ネーミングが凄い。
★梅酒とパッションフルーツとハチミツレモンをまぜてリンゴ酢を加えた味！簡単に言えば水でうすめたチェリーコーラ。

どくだみ茶　（宝酒造）
カンにドクロを描いたコトのみ評価したい。変に甘ったるいどくだみ茶だ。

ニッケ水　（オーパイ）
ボーリングのピンのようなビンの中に、毒々しい黄色い液体が……口にあてがったとたん、ニッキアメのキツイにおいが鼻について飲む気がしなくなった。一口飲んだら舌が痛い。二口飲むと胃まで痛くなる。これ、きっと浸透圧が高いんだな。ものすごく甘いアサダアメ、いやものすごく甘い今治水か。会社名もヘンだ。

スッキリ50　（常盤薬品工業）
夜ふかしや車の運転に「すっきりさわやか」はいいけど300円は高い。
★思いっきりミント！口中が涼しくなっちゃったよ。10円のオレンジガムの味、あと味はジンタン。どう見ても体に悪い気がする。

ケニヤ茶ポレポレ（サントリー）
ポレポレとはスワヒリ語で「ゆっくり」という意味とか。さすがメジャーのサントリー、まったく期待はずれのタダの甘さひかえめ紅茶。

麦ミルク　（サントリー）
ポレポレがはずれの分だけ、サントリーのこれは期待したい。
★缶のミルクセーキの薄めたヤツにコーヒー風味をつけた感じ。虫歯になりそうな甘さだ。

妙高ヘルシー　（妙高ヘルシーMT）
原料はキャベツ・レタス・あまちゃづる・くまざさ・おおばこ・タンポポなど。長野県にはそこら中にはえてるものばかり、金がかかってないぞ。あまちゃづるを飲みながら、ウメボシアメをなめていて、まわりの水あめがカキーンと割れて中のウメが出てきた瞬間の味だよこれは。簡単に言えば、ササをくわえたときのアト味が残るプルーンジュース。

のど飴ドリンク（カルピス食品）
この発想だけでもたいしたモノ！カルピスもなかなかやるぞ。味は、のど飴を水にといた感じ。ちょっとすっぱいけど、飲み終ったあとはスッキリする。

ゆずハニー　（光食品）
ネーミングの勝利だねこれは。すっぱいゆずの味で甘さはハチミツ。

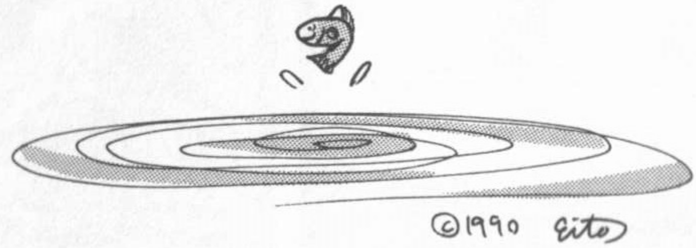
えぞうこぎ　（ヤクハン製薬）
エゾウコギ＋ウーロン茶＋ハト麦＋ハブ茶とあるが、ウーロン茶とハト麦を思いっきり水で薄めたみたい。エゾウコギとはいったい何だろう。飲んだアト何かが舌に残るけど、それがエゾウコギかな？

柿サワー　（木本商会）
以前買いのがした柿のジュース、同じものじゃないけど、やっと出会えて嬉しいぜ。でも味はピーチネクターを水で割ってレモンを入れたみたい。これ柿じゃないよ。お菓子のラムネを水でといて飲むとこの味だ。

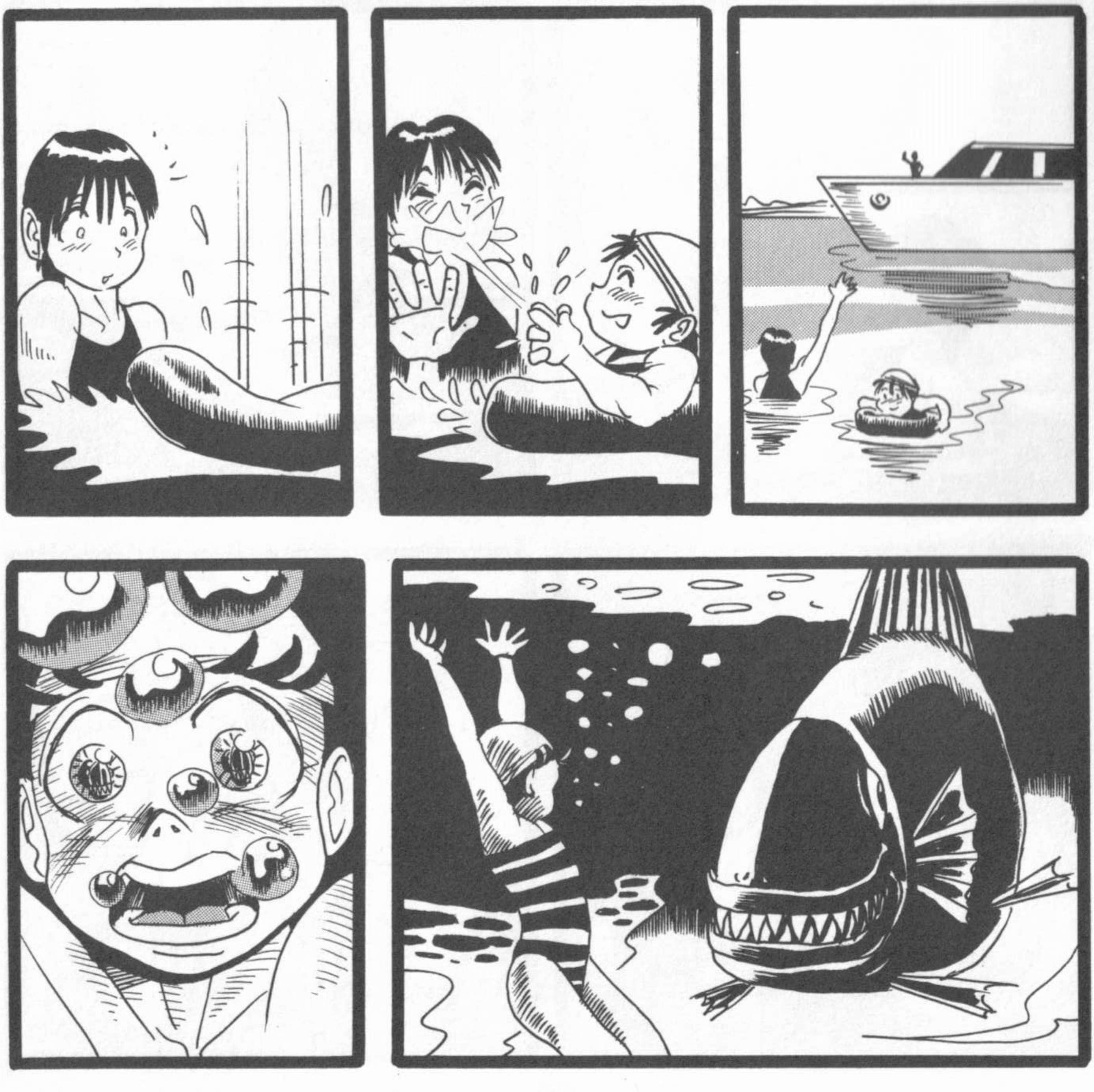
（漫画の手帖グルメ特捜班）



魚の町



くり鋭斗




おい！ボートが転覆したぞ
POLICE
55
……？
さかなさかな……
あっ


さかなが……おっきなさかなが……
……とうわごとのように繰り返すばかりで……
COMMISIONER
君はどう思う？
あの湖にサメはいないし……スクリューに巻き込まれたのかと……
そうか……ごくろうだった……



漫画の手帖・32号
1991年1月15日発行　編集人・佐野邦彦　発行人・藤本孝人　企画編集・三軒茶屋プリザベーションソサエティ
発行所・漫画の手帖事務局　東京都杉並区上荻2−27−18・藤本方　印刷所・曳航社　千葉県市川市市川2−30−25　☎0473（26）6484
150円